river activities council RAC

みんなでふやそう！川のファン

特定非営利活動法人川に学ぶ体験活動協議会
〒114-0014　東京都北区田端 1-11-1 勘五郎ビル 104 号
TEL.03-5832-9841　http://www.rac.gr.jp

RAC設立20周年記念　川に学ぶ

river activities council RAC

RAC設立20周年記念
川に学ぶ

はじめに

“生きる力”とは、“生かされていることを知る”こと。私たちは自然に生かされている。自然体験活動の定着に関わってきた私の理由です。米国のサマーキャンプの様子を聞いたのがきっかけでした。ＲＡＣが普及に努めているＥ－ボート製作の依頼を受けたのがＲＡＣとの始まりです。

現在、地方自治体の首長をしております。2004年、水害と地震で激甚災害を2度経験し、防災教育の重要性を痛感しました。2012年には、文部科学省の支援を受け、RACを中心に防災キャンプを立ち上げ、今日まで続いています。この活動は、地域に根ざした固有の教育活動を展開していると評価され、教育分野で権威ある博報賞・奨励賞を本年度受賞しました。

河川の豊かさ危うさを伝える伝道師の育成に携わり20年、ＲＡＣは2018年には、第20回日本水大賞を受賞しています。ＲＡＣ設立20周年にあたりその活動を記念誌として取り纏めさせていただきました。

代表理事　久住 時男

INDEX

「良い子は川で遊ばない」から「良い子は川で育つ」へ

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会 副代表理事　宮尾 博一 …… P.4

川遊び・川学びのプロ集団（RAC）

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会　吉野 英夫 …… P.8

川に魅せられて

NPO法人 まち・川づくりサポートセンター 事務局長　森井 智江 …… P.18
小川原湖自然楽校 代表　相馬 孝 …… P.22
阿賀川・川の達人の会　二瓶 重和（しげっち） …… P.24
カワラバン 代表　菅原 正徳 …… P.28
NPO法人 ダウン・ザ・テッシ　大内 雅司 …… P.32
日本大学理工学部まちづくり工学科　田島 洋輔 …… P.36

川が紡ぐ仲間達

NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク 理事長　土井 裕子 …… P.42
NPO法人 川塾北九州　内村 政彦 …… P.48
特定非営利活動法人 緑の風　浅野 純一 …… P.54
NPO法人 帯広NPO２８サポートセンター　千葉 利光 …… P.58

素敵な水辺の見つけ方

仁淀川清流保全推進協議会　石川 妙子 …… P.64
NPO法人 鶴見川流域ネットワーキング　中原 優人 …… P.68
NPO法人 しりべつリバーネット　南 重光 …… P.74
くりこま高原自然学校　塚原 俊也 …… P.78

河川教育は郷土を愛する心を育てる

学校連携部会長　関西福祉大学大学院教授　金沢 緑 …… P.80

「水辺といきる」これからのまち

一般社団法人 環境文化研究所　田中 謙次 …… P.84

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会理事役員名簿 …… P.90
特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会会員名簿 …… P.91
冊子委員 …… P.93

「良い子は川で遊ばない」から「良い子は川で育つ」へ

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会
副代表理事　宮尾 博一

岩からの飛び込みに挑戦

1．活動の始まり

「“良い子は川で遊ばない”が常識になっている社会を変えたい」これが私たちの活動の始まりでした。

NPO法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）の誕生は、平成9年（1997年）の河川法改正、同10年6月の河川審議会小委員会答申「川に学ぶ社会をめざして」まで遡ります。この答申では、『現代は、「川に学ぶ社会」を創造することが求められている。そして、それを創造するためには、まず、川の魅力とその本来の姿を広く多くの人に伝えることが大切だ。』という提言がなされました。

RACは、この「川に学ぶ社会」すなわち「次世代を担う子どもが、安全に楽しく川の恵みを享受できる社会」を目指して、平成12年9月に関係機関のご支援を受けて、市民団体、公益法人等を主体に12団体で設立しました。その後、平成17年にNPO化し、現在では、全国各地の100を超える市民団体や自治体、学校、企業などを会員とする組織となっています。そして、これまでに育成された川の指導者約6,000名が、全国各地で「川の恵みを享受できる社会の推進」のために日々活動を行っています。

“身近な川”は知識としてではなく、身体で感じ、学ぶことができる絶好の場です。日頃は縁遠く感じている川に実際に入る体験活動をすることによってこそ、本当の環境教育、すなわち川や住んでいる地域を好きになり、ひいては地球規模の環境に配慮した生活のできる人を育成することにつながるとRACは考えています。

RACの活動の目的は、川での体験活動を通じて、水環境の保全や人間性の回復をめざした活動を時代時代に合わせて総合的に展開し、次世代を担う子どもたちが力強く育つお手伝いをすることです。川での体験活動には、水辺の自然や生きものとのふれあい、自然の安らぎ、自然のいとなみに対する気づきといった面白さがある反面、水難事故など自然の厳しさや危険と常に直面していることも事実です。

このため、川は絶好の学びの場だとわかってはいても、危険を避けるために、子どもを川には近づけないということが、社会の風潮でした。

そこで、RACは、子どもや大人が安全に楽しく川での活動を体験できる機会を作り出すために、川での危険や身の守り方をはじめ、様々な川の魅力を伝えることのできる人材を養成することから活動を始めました。「川の指導者養成ハンドブック」を整備し、「川の指導者講習」を全国各地で展開しました。また、体験学習を通して危機管理の基礎知識「自分を守る」ことを学ぶ「子どもの水辺安全講座」や、「学校リーダー講座」をはじめ学校との連携事業など、全国の子どもや大人が身近な川で安全に遊び・学べる機会を作り出す活動を、全国の構成団体の活動を通じて展開しています。

2．川の指導者養成システム

活動を始めたころには、「川の指導者」という概念も明確ではなく、指導者を養成するカリキュラムも認定制度も何もない状況からのスタートでした。指導者の養成講座を開設するにあたり、川の指導者とは、どのような指導者であるべきか、どのようなスキルを持ち合わせていればよいのかなど、全国で行われている様々な活動を通じて検討しました。活動するときの安全対策に始まり、川という自然や環境への理解、川と人、社会との関わりである川文化、そして、指導方法や指導技術など川の指導者が身につけるべきと思われる知識や技能は、大変多岐にわたっていました。

RACでは、これらの内容を、整理・体系化して、指導者養成システムをつくりあげました。このシステムでは、指導する活動の規模、難易度に応じた四段階の資格を定め、段階に応じた指導者の役割と必要な技能の目標を決めており、それぞれの養成講座では、この目標が達成できるように講義と実技を組み合わせた詳細なカリキュラムが組まれています。これらの資格を取得した指導者は、一定期間の活動経験を積むと上位の資格を受講できるようなシステムになっています。

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会
副代表理事　宮尾 博一

3. 水難事故《ゼロ》を目指せ！
～命を守る《川育ライフジャケット》

水難事故は避けなければなりません。RACでは、活動の目標のひとつに「水難事故防止・水難事故ゼロを目指す」ことを掲げています。水難事故から子どもや大人を守るには、ライフジャケットの着用が最も効果的です。RACでは、当初からライフジャケットの有用性を訴え、ライフジャケット着用の普及を推進してきましたが、「着けるのがカッコ悪い」、「着ける意味を知らない」、「高価だ」、「販売している場所がわからない」などの理由で広まってこなかったのが現状です。加えて、これまで我が国には川遊び用のライフジャケットとして推奨できる安全基準や試験・認定制度が存在していませんでした。

そこで、平成27年5月、RACは関係機関と協力し、強度や浮力、フィッティング構造など川での体験活動に適したライフジャケットの性能基準を策定し、「RAC認定川育ライフジャケット」認定制度を構築しました。このことにより、今では、「RAC認定マーク」が付いた安全なライフジャケットが、ホームセンター等でリーズナブルな価格で販売されるようになり、ライフジャケットの普及が促進されています。

RACでは、今後もこの「RAC認定川育ライフジャケット」を普及させることにより、川の安全利用・水難事故防止の促進を図っていきたいと考えています。

また、大人、子ども用のライフジャケットに加え、高浮力（11kg）でかつレスキュー活動に活用できる指導者用のライフジャケットのほか、軽量のスローロープ（15m）や、より安全な水辺の体験活動を普及するためのRACオリジナルグッズの製作・普及も行っています。現在は、これらの機材の各地への貸し出しを行うほか、販売もしています。

ライフジャケットを着けて川歩き

4. 子どもの笑顔であふれる川に

全国のRACの構成団体は、前述の体系的なシステムによるトレーニングと経験を積んだ指導者たちのもと、子どもたちを地域の身近な川へ誘い、実際に川で体験する「子どもの水辺安全講座」や「川流れ体験」など様々な活動を実施しています。川の楽しさを体験し、危険を事前に予知する能力を養い、この危険を回避する方法を身につけるためのプログラムを実践しています。安全は自分で確保することを学び、そして川の楽しさを共有し、自分たちの身近な川のファンになることも目指しています。

川の体験活動をとおして、人と人とのかかわり、自然のエネルギーとのかかわり、生き物とのかかわりを学んで成長していくことが、人にとってとても大切なことだと考えています。

安全な管理や指導を受けて「川で遊んだ良い子」は、幅広い知識や能力、人としての優しさや強さ、生きる力を身につけるに違いありません。「川に学ぶ社会」の実現に向けて、子どもたちの今と我が国の将来のためにRACは活動を続けています。

みんなで川遊び

川遊び・川学びのプロ集団（RAC）

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会　吉野 英夫

1．身近な川や水辺は、多様で豊かな自然の宝庫

子どもたちにとって身近な川や水辺は、豊かで多様な動植物を育み、身近な自然を代表する存在として、魚釣りなどのさまざまな遊びの場であり、楽しい思い出とたくさんのことを学ぶ場でもあります。また、川を流れる豊かな水は、私たち人間の日常生活に多くの恵みを与え、時には災いをもたらすものの、歴史的に見ても古くから人々の社会・経済活動と深く関り、なくてはならない存在でもあります。

しかし、昭和30年代以降、社会経済の発展や人口増大に伴う都市化の進展とともに、水質の悪化や治水対策・水利用優先の河川整備等により、身近に存在している川にもかかわらず人々の日常生活の中からは次第に離れたものとなってしまいました。

その後、高度経済成長が一段落した平成に入り、人々は物質的な豊かさから人間的な豊かさや精神的なゆとりへと目を向けはじめ、身近な自然環境への関心の高まりに合わせ、平成9年には「河川法」が改正され、それまでの「治水」と「利水」に加え、「環境」が法律の目的に位置づけられ、河川の持つ自然環境の保全と整備にも配慮した様々な取り組みが本格的に進められることとなりました。

この取り組みの一つとして、古くて深い川と人々との関わりの再構築を目指し、次世代を担う子どもたちを主体として、多様で豊かな自然を有する川や水辺をフィールドやテーマとし、楽しく遊ぶ体験を通した学びを実践する活動が重要であると再認識され、実践することとなりました。

この取り組みを具現化し実践する人材（川活動の指導者＝川遊び・川学びのプロ集団）を育成するために、全国の川にかかわる活動を行っているＮＰＯや市民団体等に呼びかけ組織化され設立したのが、「川に学ぶ体験活動協議会（通称：ＲＡＣ）」です。

2．川や水辺には、内在する様々な危険も

子どもたちだけではなく大人も含め、楽しく魅力的な遊びや学びの場である川や水辺には、内在する様々な危険（リスク）があることから、これらのリスクを予見し、必要な対応をすることで安全に楽しく活動を行うことができます。

川は、自然そのものであり、気象（特に降雨）により流れている水（水量、水位、流速など）は、常に変化するものです。さらに、川の水は、体温と比較し低温であることが一般的です。このように、「水の存在」と常に変化する「水の流れ」には、様々なリスクが存在します。

また、体験活動を実践するうえでは、子どもや大人、男女など様々な属性の参加者があり、活動を運営する指導者等も含めた「人の側」にも様々なリスクが存在することも認識する必要があります。

さらに、活動するプログラムによっては、「使用する資機材」やその「行動内容（行為）」にも様々なリスクが存在します。

なお、内在するリスクやそれぞれの対応等の詳細については、「川に学ぶ体験活動協議会」、「公益財団法人河川財団　子どもの水辺サポートセンター」、「国土交通省水管理・国土保全局河川環境課」などのホームページや公開資料等を参照してください。

このような様々なリスクを内在する川や水辺をフィールドとする活動を、安全に楽しく実践していくためには、リスクに対する正しい認識とそれらに対応できる必要な知識やスキルを有し、豊富な経験を持つ指導者が必要不可欠となります。

20年余にわたり、このような川の指導者（川遊び・川学びのプロ集団）の育成を中心とした取り組みとともに、川や水辺での痛ましい水難事故防止の啓発活動を進めてきているのが「RAC」なのです。

3．川遊び・川学びのプロ（指導者）の育成

次世代を担う子どもたちや多くの一般市民等を川に誘い、様々な体験活動を安全に楽しく実践し指導できる川の指導者（通称：RAC指導者）を育成するために、RACでは設立当初から指導者養成に必要な制度や仕組みを整備し、これまでに6，000人余の指導者養成を行ってきており、これらのRAC指導者は全国の河川や水辺において川遊び・川学びの活動を日々実践してきています。

この制度や仕組みの基本は下記のとおりとなっていますが、現在では、より専門的な知識やスキルの習得・付与を目指し、実践を通した講習プログラムが整備されています。

【基本的なRAC指導者の養成制度】

リーダー(初級) ▶ インストラクター（中級） ▶ コーディネーター（上級）

※リーダー（初級）には、学校の教員等を対象とした「学校リーダー」養成制度があります。
※コーディネーターは、川での指導経験と定められた講習を修了すると、『RACトレーナー』として、RAC指導者の養成に必要な講習会を企画・運営ができるとともに、RACの活動の普及・展開をつかさどる役割も担うこととなります。
参考として、RACリーダー（初級）養成講習の内容を紹介すると、表-1（次頁）のとおり、8科目、21時間（講義8時間、実技13時間）の講習を履修する必要があります。講習の科目の内容をみると、川や水辺をフィールドとして安全に楽しく活動するに必要な基礎的な安全対策（リスクマネジメント）のスキルを身につけてもらうことに重点が置かれていることがよくわかります。

表 - 1. リーダー養成講習の内容

	科目名	内容（身につけるスキル）	時間数
1	川に学ぶ体験活動の理念	●RACの意義を理解し広く一般に伝えることができる。 ●RAC指導者認定制度を知り、参加する方法を理解する。	講義 1
2	川という自然の理解	●川という自然の体系的な仕組みや生態系について基礎的な概要を知る。	講義 1 実技 2
3	川と人、社会、文化の関わり	●川と人の暮らしの関わりについて基礎的な事柄が理解できる。 ●人の生き方、暮らし方と川との関連について知る。 ●川と関連して生まれた技能・芸能・伝統文化について初歩的な知識を得る。	講義 1 実技 2
4	安全対策について	●RACでの安全対策、安全管理について知る。 ●基本的な救急処置法を実習、経験する。 ●指導者の責任、その範囲について知る。	講義 1 実技 3
5	川に学ぶ体験活動の基礎技術	●川に学ぶ体験活動における基礎的な技能を知り、これらを習得する。 ●自然環境への配慮、他利用者への配慮・川でのマナーの必要性を知る。	講義 1 実技 2
6	対象となる参加者を知る	●参加者の状況を指導計画に活かす意味を理解する。 ●指導者として参加者に配慮すべき事柄を理解する。 ●川に学ぶ体験活動を提供する指導者としての心構えを認識する。	講義 1 実技 1
7	川に学ぶ体験活動の指導法	●RACの基本的な指導法とより効果的な指導法について知る。	講義 1 実技 3
8	プログラム作りの基礎知識	●川に学ぶ体験活動に適したプログラム作りの基礎知識を知る。	講義 1
			講義 8 実技 13 合計 21 時間

※この他の各種プログラムの内容については、RACのホームページ等を参照ください。

さらに、RAC指導者等へのより専門的な知識やスキルを習得・付与を行う様々な講習プログラムについては、現在、次のようなものがあります。

【RAC指導者が専門的な知識やスキルを取得できるプログラム等】

①水辺のリスクマネジメント講座
②水辺のレスキュー講習
③レスキュー・インストラクター講習
④水辺のファーストエイド講習
⑤Eボート指導者講習
⑥水辺の生きもの講座
⑦学校連携コーディネーター養成講座

【一般を対象とし専門的な知識やスキルを取得できるプログラム等】

①RACアシスタントリーダー講座（基礎講座）
②子どもの水辺安全講座
③水辺のリスクマネジメント（水難事故防止）講座
④全国一斉1万人・川の流れ体験キャンペーン
⑤Eボート体験
⑥水辺の生きもの観察

4. RAC指導者の活動分野

これまでの20年余の歴史を経て、全国各地の河川や水辺で活動するRAC指導者は、当初目標10,000人には届いていないものの6,000人余りと、川に関する専門的な知識とスキルを有する組織化された大きなプロ集団となってきています。

そして、指導者としての活動分野は社会の変化や国民のニーズに合わせ多岐に及んできています。

RAC指導者の活動分野について区分すると、下記のとおりおおむね大きく3つに区分されます。

●次世代を担う子どもたちを主体とした体験を通した教育活動
●地域住民等への水防災意識社会構築に向けた防災活動
●地域への貢献（活性化や観光振興等）

そこで、それぞれの分野での活動や取り組みの経緯や内容について整理してみると、次のようになります。

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会　吉野 英夫

（1）次世代を担う子どもたちを主体とした体験を通した教育活動

多様で豊かな自然を有する川や水辺への関心の高まり

平成１０年の「『川に学ぶ』社会をめざして」の報告をもとに、川と人との関係を再構築するための取り組みとして最も重点的に取り組まれたのが、次世代を担う子どもたちを身近な川や水辺に誘い、その魅力についてさまざまな体験を通して川への関心と理解を深めてもらうこと、さらに、河川環境の保全と整備の重要性を認識してもらうことです。

ＲＡＣ設立時の平成１２年は、学校の週５日制が実施され、平成１４年度から本格的に実施された「総合的な学習の時間（以下、「総合学習」と言う。）」の試行が始まった時でもあり、週末等を利活用した学校外での様々な体験活動とともに、学校教育現場においても総合学習の活動として、身近な自然を利活用した学習活動が実践されるようになりました。

身近な川や水辺の利活用に向けた取り組み

日本の多くの河川で悪化していた河川の水質は、下水道の整備等の取り組みが進展し、多くの河川で水質改善が図られ、河川整備においても人々に利活用してもらえるような親水護岸や河川の自然環境を復元・整備する取り組みも全国各地で行われはじめました。

河川管理者である国土交通省は、文部科学省及び環境省と連携し、次世代を担う子どもたちを川に誘い、様々な体験活動を推進するための「『子どもの水辺』再発見プロジェクト」の施策を全国の河川で実践するために、それぞれの河川に関わる教育関係者、ＮＰＯや市民団体等とともに、体験を通した様々な活動の支援を行うこととなりました。

この取り組みを推進する中心をＲＡＣが担い、さらに、全国各地の河川で指導・実践する先駆者としてＲＡＣの川の指導者の活躍が期待されています。

川や水辺を利活用する教育効果

子どもたちの学習は、学校教育がその多くを担い、文部科学省が定める「学習指導要領」に示された内容に沿って進められています。

学習指導要領では、子どもたちに「生きる力」を育むことをねらいとしています。また、体験を通した学習の必要性を重視することが明示されています。さらに、令和２年度から施行された学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現」（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）の重要性が示され、先生から子どもたちへの一方的な指導ではなく、子どもたちが自ら課題を見つけ調べ、周りの友達とも話し合いながら問題解決を行う学習の流れとなっています。

このような学校現場での取り組みの現状を見ると、多様で豊かな自然環境を有する身近な川や水辺での体験を通した活動は、子どもたちの感性が磨かれ、様々な気付きから興味関心を持ち、自ら調べ学習する題材が沢山あると言われています。ＲＡＣの活動に関わりの深い教育関係者からは、川や水に関わる様々な事象は、学校現場での学習素材として利活用できる素晴らしいものが沢山あると高い評価をいただいています。

ある小学校において、身近な河川を利活用し、体験を通した様々な学習を通して子どもたちの感性が育まれ、理性を高める教育効果があったと報告されています。

（※川や水辺を利活用した学校教育については、後述の「河川教育は郷土を愛する心を育てる」を参照。）

このために、ＲＡＣ指導者が、学校教育現場と連携し、子どもたちの体験を通した学習活動を支援できる知識やスキルを身につけるための「学校連携コーディネーター」制度を整備し、その育成に力を入れているところであります。

学校連携コーディネーターによる学校現場との連携の輪が広がり、今後、全国各地の川や水辺を利活用した教育活動の普及・展開されることが期待されています。

（2）地域住民等への水防災意識社会構築に向けた防災活動

恵みの川（水）

ＲＡＣの活動は、子どもたちをはじめ多くの人々を川や水辺に誘い、十分な安全管理のもとで参加者が様々な活動を安全に楽しく体験してもらい、楽しい思い出とともに身近な川や水辺が魅力ある存在であることに気付き、自分たちにとって関りの深い大切なものであることを認識してもらい、その輪が広がっていくことが重要となります。

身近な川に流れる水の存在は、私たちの日常生活に不可欠な飲料水をはじめ、社会経済活動を支える工業用水や農業用水を供給する水源として多くの「恵み」を与えてくれるとともに、多様な動植物の生息を支える場でもあり、これまでもこれからも私たち人間と深くかかわり続ける存在です。

災いの川（水）

私たちの身近な川は、まさしく自然そのものであり、時には、大雨による洪水災害や土砂災害を引き起こし、日常生活や社会経済活動に甚大な影響（「災い」）を与えることもあります。

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会　吉野 英夫

私たちの住む日本列島は、歴史的に見てもこれまでに多くの自然災害が発生してきています。その中で、台風や梅雨前線等の大雨による洪水等の水災害も多く発生してきており、特に、近年は激甚な被害をもたらす洪水災害や土砂災害が毎年のように発生し、これら水災害から人々の「命を守る」ための防災対策の重要性が高まり、国においても様々な施策や取り組みが進められています。

RACの活動は人々の防災意識の高揚につながる

RACが日頃から実践している川や水辺を利活用した体験活動は、水に触れるプログラムが多くあり、特に、川の流れ体験のように水の流れを体感することで、水の流れには圧力があることや川の形状(川底や水深の変化）によって複雑な流れがあることを認識することができます。

このような体験を通して水の圧力や複雑な流れは、活動するうえでのリスクとなることを体感することで、参加者自らが注意しリスク（事故につながる）を回避し、命を守ることが大切であることを認識することにつながります。

このような体験活動を通して、水の存在と流れに内在するリスクを実感し、セルフレスキュー（「自助」）の重要性を認識し、さらに、川や水辺での活動では、仲間との助け合い（「共助」）の大切さも併せて認識することができます。

このことから、川や水辺を利活用するRACが実践している様々な体験活動プログラムにより多くの子どもたちや住民が参加することで、さまざまな環境に内在するリスク（水災害を基本として）に対し、「自助」、「共助」の重要性を認識し、リスクからの回避行動ができる防災意識を身に付けることにつながることが期待できます。

（3）地域への貢献（活性化や観光振興等）

地域住民のコミュニティの醸成

RACに所属するNPOや市民団体等は、それぞれの地域を流れる身近な河川や水辺をフィールドとして、地域特性や河川特性に熟知し、地域や河川環境に適合した体験プログラムを実践しています。

体験活動に参加する子どもたちや保護者を含めた地域住民は、参加者同士が初対面であっても、安全に楽しく行動するためのアイスブレイクやセーフティートークを通して、互いに信頼し助け合いながら体験活動を行うことを経験します。一つのプログラムを達成することで互いの親近感が醸成され、コミュニケーションが育まれていきます。

参加者（特に子どもたち）の多くは、リピーターとなって何度も活動に参加されることが報告されており、RACの活動を通して子どもたちや地域住民のコミュニティが醸成され、広がっていくことが期待できるところです。

このことは、RACに所属するNPOや市民団体等の活動の継続や活性化にもつながっていくものと考えられます。

企業等との連携による活動の活性化

国内の企業の多くは、企業活動の一環として様々な社会貢献活動や企業の立地する地域貢献活動を行っています。この中で、川や水辺での様々な活動に関連する活動を行っている企業も数多く報告されています。

川や水辺をフィールドとして、企業が地域住民等と連携・支援する活動の中で多いものが清掃活動となっており全国の多くの河川で実践されています。

RACに所属するNPOや市民団体の中には、地域の企業等と連携し、企業の職員や家族が様々な体験活動に参加するとともに活動資金等の支援を受けている事例が、平成２８年度の国の調査で報告されています。

このような企業等とRAC加盟団体とが連携している活動事例は、お互いが有する特性とを補完・活用することで、地域行政や学校等とも連携することにもつながり、RACのめざす川や水辺を利活用する様々な体験活動の活性化と継続につながっていくことが期待できます。

地域活性化や観光振興等への寄与

地域特性や河川特性に熟知し、地域に根差した活動を実践しているRAC加盟のNPOや市民団体等に所属するRAC指導者は、活動を通して多くの地域住民や企業、学校、行政機関等との強固なネットワークを構築しています。

地域を流れる身近な河川での様々な体験活動を継続実施することで、より多くの子どもたちや地域住民等との交流が生まれ、地域コミュニティの醸成や川での活動を中心として地域の活性化につながってきている事例が多くあります。

さらに、魅力的な活動プログラムは、地域外からの参加者の増大にもつながり、観光振興に一役買っている事例もあります。

このような地域特性や河川特性を生かした魅力的なプログラムを継続して活動する取り組みは、RAC加盟団体自身の自立にもつながり、RAC指導者の活動継続のモチベーションアップにもなっています。

5. これからのRAC指導者の活動の展望

（1）様々な課題への対応

RACの活動も20年余りの歴史を刻み、全国各地で活発な活動が展開されてきているものの、様々な課題も出てきています。

主なものとしては、永遠の課題とも言える「人」、「金」、「もの」が、これまでもこれからも続くことが考えられます。

「人」に関する課題と対応

RAC活動を推進する各加盟団体では、組織の運営や活動の企画実践を担う中心的な指導者が仲間を募り、様々な体験活動を行っています。これらの指導者は20年を経て高齢化し活動を引き継ぐ後継者が不足している団体があり、せっかく地域に根付き住民等からも期待され評価されているにもかかわらず、今後とも活動を継続していけるかが懸念されている状況となっています。

中には、円滑な世代交代を行い、活動する仲間の輪も広がり、今後しばらくは活発な活動を継続できる人材を確保できている団体も見受けられます。

RACとしては、多くの加盟団体において共通の課題となっている後継者の育成と円滑な世代交代を進めていくために、後継者の育成と円滑な世代交代ができている団体等の事例を参考として、将来にわたりRACの活動を推進してくれる人材（川の指導者の育成を重点的に）の育成に向けて知恵と工夫を図っていく必要があります。

「金」に関する課題と対応

団体等を組織し運営していくことと併せ、様々な体験活動を企画・運営するために不可欠と言えるのが必要な資金の確保となります。

活動資金の確保については、各種基金の活用、企業との連携、行政機関等からの支援など、いろいろな方法が考えられますが、それぞれの団体の有する特性や活動する地域特性とを見据え、さまざまな手段・方法等を駆使し苦労していることが伺えます。

しかし、これらの資金を長期間継続して確保していくには限界があり、活動団体等として自立していくためには、体験活動への参加者に応分の負担（参加費）をしていただくことが必要と考えられます。そのためには、体験活動として実践するプログラムの内容が子どもたちや住民から見て魅力的なものとする必要があります。そして、参加費を負担して来てくれた参加者が活動内容に十分満足することができれば、周りの人に口コミで広報してくれることが期待でき、次の機会にはリピーターとなって友達を連れてきてもらえることも期待できます。

また、RACの活動が、子どもたちの成長や住民の日常生活の中では経験できない貴重で楽しく魅力的なものであり、参加費を負担してでも参加したいと思えるよう、広く地域住民や国民に広報し認識してもらうことで、身近な川や水辺での活動が地域の文化になっていくことが必要と考えます。

「もの」に関する課題と対応

ものには、様々な活動を安全に楽しく行うために必要な資機材や装備等が考えられますが、活動のフィールドとなる川や水辺も含めて考える必要があります。

川は自然そのものであり、大雨による洪水等により活動場所の地形や水の流れなどが大きく変化してしまうことが多々あります。このためには、利活用しやすいような河川の整備・保全に協力・支援してもらえるよう日頃から河川管理者等と連携し信頼関係を構築しておくことが重要となります。

さらに、多くの参加者が集うことから、活動場所に近接して水道やトイレ等の利便施設があることが望まれます。これらについても、地元自治体等の関係機関と連携し支援・協力してもらうことも重要となります。

活動に必要な資機材や装備等については、当面はRACのレンタル制度を活用することもできますが、前述のとおり必要な活動資金が確保できれば、徐々に備蓄・整備していくことができると考えます。

申すまでもなく、資機材や装備等はメンテナンスが重要であることを認識し、常に整備点検を行うことに留意する必要があります。

この参考例の一つとして、「RACのライフジャケット認定基準」があります。

（2）RACの活動は、RAC指導者が主体となる

これまで、RAC指導者に関する様々な視点から内容を述べてきましたが、RACの活動を支えているのは、「川遊び・川学びのプロ集団」であるRAC指導者一人一人の活動が原点となります。

このために、RACの活動理念に共感し、ともに活動しようと意欲を持った人材を皆さんの周辺から発掘し、RAC指導者の養成講習への参加を促し、仲間を増やす活動を地道に継続していくことが、現在全国各地の河川で活躍しているRAC指導者の使命であり最優先課題でもあります。

これからさらに20年後を目指し、川遊び・川学びのプロであるRAC指導者の皆さんの活躍を期待します。

川に魅せられて

NPO法人 まち・川づくりサポートセンター　事務局長　森井 智江

子どもの頃、もし、未来の自分へという手紙を書いていたとしたら、川の活動をしている今の自分にとても驚くと思います。

５才の時のことです。隣の家の仙ちゃんというお兄ちゃんが川でおぼれて亡くなりました。おばさんは「母さんが行くんでないってあれほど言ったのに…母さんの言うことを聞かないから…」といって泣き崩れていました。近所のおばさんたちは「耳から川の水が出て布団が濡れる」と言ってビニールを敷いています。お葬式に集まった子ども達は、両手に持ちきれないほどのお菓子を頂きながら「仙ちゃんの分も長生きするんだよ」と言われました。いつの間にか、私たちは仙ちゃんが居ない日常に慣れ、仙ちゃんが居なくなったことを忘れたかのように遊んでいました。でも、川のそばに行くと誰かが「仙ちゃんが寂しがって呼ぶから、近寄ったらだめだ」と言いました。働くことで忙しい大人は、目を離した隙に子供が川に行ったら困るので、因果を込めて諭したり言い包めたりしていたのだと思います。川で命を落とす子供がいることは、子供心には恐怖でした。その記憶が大人になってもずうっと続いています。

教師になってからも「川は危ないので決して近寄ってはいけません」と指導しました。遠足で行った川のほとりには「川で遊んではいけません！」と書かれた看板が取り付けられていました。その看板には男の子が描かれています。びっくりした顔をしていますが、小魚やエビ、カラスのような鳥も描かれていて楽しそうな雰囲気も漂っています。禁止している看板なのに、楽し気な図柄は説得力が無いし、子供には逆効果だと見るたびに思っていました。特に、夏休み前は、川に行かないように強い指導をしていました。

学校が五日制になり、土日の子どもたちの居場所が課題になりました。その頃、先輩の教師に滝川市が主催する「少年科学クラブ」の手伝いをやってみないかと誘われました。様々な体験を通して科学の目を養うという趣旨の活動でした。やってみると面白くて自然体験の魅力にどっぷり浸りました。指導者という立場を忘れて参加者と一緒になって楽しみました。土曜日の活動なので大勢の子供たちが参加しました。

ある時、ペットボトルでイカダを作り川に浮かべるという活動を行うことになりました。私は、あまり気乗りはしませんでしたが、スタッフは大勢いた方がいいと言われて渋々活動に参加しました。子供も指導者も初めての川の活動でした。安全に活動するため、活動場所の下見をし、安全面を最優先に実施しました。その当時は、気持ちに余裕がなく、楽しくて意義のある活動にも拘らず、「ダメ！」「危ない！」などと禁止と規制するような言葉ばかりを言っていたと思います。しかし、子ども達の笑顔や、とても楽しそうな姿、イカダがひっくり返っても何度も何度も挑戦し、時間を忘れるくらい夢

「ミズベリング石狩川」で語った夢の川下り（2016年）

四季折々の石狩川をガイドしていきたい！

NPO法人 まち・川づくりサポートセンター　事務局長　森井 智江

中で楽しんでいる様子を前にして、川に対する考え方が少し変わったことも覚えています。その後、リスクマネージメントという事について研修する機会があり、川の活動をする上で必要な資格も取得することになりました。この頃、教育現場では、新たな教科として生活科が導入され、体験を通して学ぶことが重要視されるようになりました。川の活動は、理屈抜きの楽しさがあります。初めての体験ならばなおのこと、川に触れる感触や水と戯れる楽しさは感動そのものです。学校でも直接体験が必要なことは分かっていましたが、屋外の活動は、じっくり取り組みたくても時間をかけることが難しい活動でした。川となるとさらにハードルが上がりました。「どうすればできるだろうか」とあれこれ考えましたが、これという妙案は見つからないままでした。

４０代になり、５，６年生の理科を受け持つことになりました。夏休み前に、教頭先生から「『川の水生生物調査』を何とかやってくれないだろうか」と頼まれました。待ってましたと言わんばかりに返事をすると「本当にいいのかい？」と何度も念を押されました。したくてもできなかった川の活動ができるのですから、私にとってはチャンスでした。北海道開発局が主催していたので、バスの手配など、何から何まで至れり尽くせりでした。一番の収穫は、参加した子ども達が「面白かった。また行きたい！」と教頭先生に言ってくれたことでした。これを機会に、５年生の活動として、しばらく定着しました。

定年退職後も今の活動をすることを迷わず選びました。

「私で出来ることなら何でもします」を売り言葉に、後輩たちの学校に出向いて、川の活動をＰＲしています。川の活動に協力してくれる学校も少しずつ増え、こうして今も、川の活動を続けられることに感謝と喜びを感じています。

子ども達の笑顔が活躍の励みに！

私は今まで、人に教える仕事をしてきましたが、川の活動に関わるようになってからは、自らも学ぶということを意識するようになりました。川には、私の知らないことがまだまだ沢山あります。もっと知りたいと思うところに川の魅力があるのだと思います。川に出るたびに違う表情の川に出合い、出合う生物も一度として同じだったことはありません。自然の中での活動は、偶然という一瞬の出合いと奇跡の連続だと思います。川の活動は、魅力的で奥が深いと思います。考えてみれば、私も川の活動を通して、川と向き合い、川の魅力を知ることが出来ました。そして、川の活動をしなかったならば知り合えなかったであろう多くの魅力ある川仲間に出会うことが出来ました。川は私に、学び続けるということを教えてくれました。

学校団体と川下り

今も川に行った時、ふと「あの時、仙ちゃんは、どうして川に行ったのだろう」と考えることがあります。魚つりをしたかったのだろうか。川遊びをしたかったのだろうか。水鳥でも見に行ったのだろうか。もしかしたら、川に落とした物を拾おうとした不慮の事故だったのだろうか。色々な事を想像してみますが、答えにたどり着くことは出来ません。考えられることは、川には余程の魅力があったからだと想像しています。

私のふる里を流れる石狩川には、北海道開拓の歴史と文化、産業、水や地球環境など豊かな自然と雄大なロマンが溢れています。私たちの暮らしが、その石狩川に支えられています。川の活動を通して郷土愛が芽生え、大人も子供もそれぞれが川との関わりを考えるきっかけになればと考えています。川に触れた感動や川に学ぶという気づきを参加者と共有しながら、私も川に学んでいきたいと思っています。

川に魅せられて

小川原湖自然楽校 代表　相馬 孝

私が生まれて育った弘前市には、津軽を代表する母なる川「岩木川」が流れています。小学生時分から岩木川にどっぷりと浸かり、気が付けば夏にはいつも岩木川で遊んでいました。大人たちに遊びを教わったわけでもなく、近所の年上の兄ちゃんたちに連れて行ってもらい、そのうち一人でも川に行けるぐらいになりました。川に持っていくのは海水パンツと水中メガネとヤス。そうそう忘れてならないのはマッチです。川の土手からジャガイモを失敬し、川ではヤスで魚を取り、流木で火を熾して焼いて食べる。これでもう一日川で遊べるのです。川ですることはただ潜ったり、岩の奥にいる魚を獲ったり、流木を集めてイカダを作ったりと、当時は普通の川の遊び方でした。

当時の小学校にはプールがなくて、学校指定の川のプールが岩木川にあり、そこにもよく遊びに行きました。市民プールに行けばお金がかかり、帰りにアイスでも買ったものならすぐに小遣いが底をつき、自ずと川へ行くようになりました。川のプールでの遊び方は主に潜りで、投げ入れたきれいな石を川底から取ってくるというものです。その頃の岩木川はまだ水質も良かったので、水中メガネをつけず裸眼でも十分わかるぐらいでした。もちろんのことですが、周りの子たちに裸眼で潜れるという意思表示もありました。そんな川のプールですが、各学校にもプールが整備されるようになると自ずと役割を終え、川では遊ばないようにとの指導の元、子どもたちの姿が川からは消えて行きました。

石にくっついている水生昆虫の確認

水中メガネで流れを体感

水中メガネで落ち込みを覗く

中学2年生になるとき、父親の転勤で弘前市から十和田市へ転校し今度は奥入瀬川と出会いました。青森県に“おいらせがわ”は2つあり、1つは十和田湖を源とする奥入瀬川。もう1つは白神山地を源とする追良瀬川。どちらも青森県を代表する河川です。高校時代、同級生らとつるんで夏にはよく奥入瀬川へ行きました。目的は魚を獲ることで目当てはヤマメとマス。市街地から離れているため、移動手段は通学用の自転車。夏の暑い日に３０分以上かけて通った記憶があります。学生時代というのは面白いもので、どんなに遠くても自転車で走り回っていました。もちろん必ず魚が獲れるわけではなく、ぼうずの日もありましたがその日はついにやりました。５０ｃｍはあろうかという大きなマスが目の前に現れたのです。岩と岩の間の奥に潜んでいたところを一突き。何と使ったヤスが曲がってしまい逃げられました。肉厚なのでヤスが貫通せずに逃げられたものと思います。すぐに友達のヤスを借りてもう一度潜り直し、隣りの岩の奥まったところにいたのを見つけ、渾身の一撃で仕留めました。とにかくこんな大物を獲ったことがなかったので、自転車の荷台からはみ出たマスを意気揚々と自宅に持ち帰りました。

少年期のこんなことが原体験として私の頭に刷り込まれ、小川原湖畔に活動を移してからは、小川原湖周辺での自然環境や体験活動に興味を持つことができ、岩木川での体験で芽生えた「きれいな水辺で遊びたい」と、体験活動に興味を持ってくれる子どもたちがもっと増えてくれることを願って、小川原湖での水遊びを積極的に勧めています。

川に魅せられて

阿賀川・川の達人の会　二瓶 重和（しげっち）

阿賀川・子どもアドベンチャークラブ「川流れ」

“阿賀川（あががわ）”は、福島県の会津地方を流れ、新潟県に入ると“阿賀野川”と名前を変えて日本海に注ぐ、全長約２１０kmの川です。源流のひとつは福島県と栃木県の県境である“荒海山（あらかいさん）”で、この山の頂上には「大河の一滴ここより生る」と刻まれた石碑があります。会津地方を流れる大小の河川や、猪苗代湖や尾瀬沼などの湖沼は、すべて阿賀川の支流です。

昭和３０年代～４０年代前半、私が小・中学生の頃の阿賀川（地元の人たちは「大川」と呼んでいて、校歌にも登場しています。）の水はとてもきれいで、授業の一環で学校から歩いて“川の学習”に行ったり、夏休みには子ども会で毎日のように川遊びに行ったりしていました。頭大の石の下に手を入れてカジカやハヤ（ウグイ）を捕まえたり、ハチヨ（アカザ）に刺されてとても痛い思いをしたり、ベナ（粘土）を持ち帰って“土器”を作ったりもしました。しかし、そんな阿賀川やその支流も、昭和４０年代の後半には汚染がひどくなり、川に入って遊ぶ人の姿はほとんど見られなくなりました。川岸に「よい子は川で遊ばない」などと書かれた立て札が設置され始めたのもこの頃だったように思います。

“阿賀川・川の達人の会”は、「人々を川に呼び戻したい」との思いをもつ有志が集まって、平成11年（1999年）にスタートしたボランティア団体です。年間をとおして“会津めだか塾（ＲＡＣリーダー講座）”や“阿賀川・子どもアドベンチャークラブ（子ども達の川遊びの会）”の他に、小学校や中学校の“総合的な学習の時間”に“川に関する学習”の支援をしたり、幼稚園や保育園、公民館、自然の家等の“川遊び”の手伝いをしたりしています。また、“ふるさとの風景”を守り伝えるために、各地区の皆さんと水生生物調査や河川の清掃活動（ゴミ拾い）等の水環境保全活動を行ったり、本会独自に特定外来植物であるアレチウリやオオキンケイギクの駆除なども行っています。私たちは「たくさんの人に川を訪れてほしい。人々の心が川に近づけば、川はもっときれいになる」との思いで様々な活動を続けています。

私たちは、たくさんの子ども達に「川遊びをとおして様々な生き物と出会ったり、流れる水を見つめたり、川面を渡る風のにおいを胸一杯に吸い込んだりしながら、季節の移り変わりを身体全体で感じてほしい。川での様々な活動の中で“本物”との出会いやふれあいをとおして、発見の喜びや感動を味わったり、不思議を体験したりしながら、知識や技能を身につけたり、ねばり強さや優しさ、勇気や判断力などを高めてほしい。」と思っています。そして何よりも、「未来の日本・世界・地球を担う子どもたちに、“ふるさとの風景（身近な自然や人々）”の中に身を置きながら、自分自身や周囲の人々の“よさ”に気づいたり、将来の自分の姿を思い浮かべたりしてほしい。」と願っています。

私たち自身も川で楽しんでいます。「行くぞー！」、「オー！」。2018年7月7日、阿賀川にオヤジ達の声が響きました。「“川の日”に、カヌーで川下りをしてみたいなあ…。」一人の会員の何気ないつぶやきが、数日後に現実の雄叫びになりました。ゆったりとした流れに乗り、ヨシ原の奥に隠れて見えなかった“秘密のワンド”に漕ぎ入ってみたり、行く手にそびえる残雪をまとった飯豊連峰を水鳥の目線で楽しんだりしながら、約10kmの川下りを満喫しました。

川の日カヌー（2018 年）

川に魅せられて

阿賀川・川の達人の会　二瓶 重和（しげっち）

阿賀川・子どもアドベンチャークラブ「源流体験」で滝の裏側に入る子ども達

振り返れば、小学生の頃の私は走ることや運動が苦手な内気な子どもで、学校に行ってもなんとなく疎外感を感じ、みんなの輪の中に入ることができませんでした。近所に同世代の子どもが10人以上いましたが、休みの日にだれかと一緒に遊んだりすることもあまりありませんでした。そんな私の居場所が、自宅のすぐ裏を流れていた“湯川（阿賀川の支流）”でした。友達に仲間外れにされたとき、親に怒られたとき、私は一人で湯川に行きました。自分の背丈よりもずっと高いヨシの茂みをかき分けて進み、秘密基地を作ってフナやナマズを釣っているうちに、いつの間にか明るい気持ちになっていました。

平成19年に、中央教育審議会から「自然体験の多い青少年の中には、道徳観・正義感があり学習意欲・課題解決意欲の高い者が多いことや、集団による長期キャンプは積極性や協調性を高め判断能力を育てるといった社会性の育成に効果の高いことが明らかとなっている。」との報告が出されました（『次代を担う自立した青少年の育成に向けて』）。また、近年は不登校やひきこもりなどからの回復プログラム・社会復帰プログラムとしても、自然体験活動が注目され、“キャンプ療法”等として活用されています。

大人になってからの私は、教員として様々な子ども達と出会ってきました。現在はスクールカウンセラーとして小・中・高等学校に勤務しており、だじゃれを装って（半分本気なのですが）「“川ンセラ～”のしげっちです」と名のっています。私は時々、川や水辺を“リソース（問題の解決に役に立つもの）”として活用することがあります。クライエント（相談に来た子どもや保護者）と一緒に川原を歩いたり、岸辺に腰を下ろして流れる水を眺めたり、時には一緒に魚釣りに出かけたりもします。「川が、この子の閉ざされた心の扉を開けてくれるかもしれない。」と思うからです。クライエントは、早瀬の音や光を受けて輝く波、頬を撫でる風、そして川のにおい…を感じながら、“内なる自分”との対話をします。私は、クライエントが「今の自分は何ができそうか。どの方向に向かって進んで行くか。」を見つけ、新たな一歩を踏み出すことができるように寄り添います。

学校に行けなくなっていた小学6年生の女の子は、友達と一緒に自分で魚を釣って焼いて食べたことをきっかけに登校できるようになりました。学校で声を出すことができなかった小学2年生の女の子は、川流れをして無意識に叫んでから友達と話せるようになりました。家から出ようとせずに自分の部屋にひきこもってゲームばかりしていた小学5年生の男子は、川キャンプで朝日が昇る前に起き出してカブトムシを捕まえに行きました。いじめられていた中1の男子は、カヌーで川を遡った次の日に相手に「やめて！」と言うことができました。これらの他にも“川で過ごした時間”をとおして元気や自信を取り戻し、明るい表情で歩き出すことができるようになったたくさんの子ども達がいます。川は、元気いっぱいの子のことも、自信を失ってしまった子のことも、等しく迎えてくれます。速い流れは父親のように力強く身体と心を揺さぶり、緩やかな流れは母親のようにやさしく柔らかく包み込んでくれるのです。

“Sometimes the river is the bridge.「ときに川は橋となる」”。2020年、東京都現代美術館で開催された「オラファー・エリアソン展」のキャッチコピー（ひとつの作品名でもあります）です。エリアソンの伝えたいこととは若干異なるのかもしれませんが、私はこの言葉を次のように解釈しました。「“川”は地域や人々を右岸側と左岸側に分け、“橋”が両者をつないでいると捉えられやすいが、見方を変えれば、“川”は上流域と下流域や海をつなぐ架け橋でもあるのだ。固定観念にとらわれずに、視点を変えて見ることが大切だ。」と。エリアソンは、私に「学校や先生の立場からだけでなく、クライエントの気持ちに寄り添っているか。ちゃんとクライエントとつながっているか」と問いかけてきます。私は、「様々な願いをもつ人々をつなぐことができる橋や川のような“川ンセラ～”でありたい。」と思いながら、今日も川を見つめます。

川に魅せられて

カワラバン 代表　菅原 正徳

2010年に8年ほど勤めた仙台市内の環境NPOを解雇されました。在職中、小学校向けの環境学習を担当しており、10数校で川の学習や体験活動をしていました。NPOから今後それらの事業は行わないので、引き継がないかと提案がありました。好きな仕事ではありましたが、私ひとりで生業として成り立たせることが可能なのか？アラサーで転職をするならこのタイミングではないか？それまで独立など考えたこともありませんでしたが、悩んだ末に事業を引き継ぐことにしました。

いくつか理由がありますが、一つは東北に同じような活動で頑張っているRACのメンバーがいたことです。身近にも前職の時から一緒に活動してきた方々が大勢いましたが、専門的なマネジメントやノウハウを相談したり共有したりできたのはRACメンバーがいたからでした。

もう一つは、川を学習のフィールドとする機運が高まりつつあることでした。年間にわずか数百人ですが、私がこの活動を継続しなければその分だけ川の学習や体験できる児童が減ってしまう。この流れを途絶えさせてはいけないという気概ももちろんですが、川での活動を希望する学校が増えていて、それを支援する行政の制度が整っている。ゼロからのスタートでないことも後押しとなりました。そして最も大きいのが広瀬川という存在があったからです。

広瀬橋から仙台のまちを望む　この景色ももちろん好きですが、広瀬橋から真下を眺めるのがもっと好き。遡上の季節にサクラマスやサケを確認しに行って一喜一憂しています。

大学への進学で仙台市に住むことになり、広瀬川に出会い衝撃を受けました。宮城県北部の田園地帯で生まれ育ったので、川といえばゆったりと流れる川しか知りませんし、かんがい用のため池のほうが身近な水辺でした。（写真絵日記）当時住んでいた霊屋下（伊達政宗公の霊廟・瑞鳳殿のあるあたり）を流れる広瀬川は、大きく幾重にも曲がりくねっていて、地図を回転して見るほど方向音痴な私は、川沿いを散歩するだけで東西南北がわからなくなるほどでした。（宮城県の奥羽山脈から流れる川は西から東の太平洋に流れる川が多いので）

川には大岩が鎮座し、白泡と波が瀬音を響かせるその流れは、仙台駅から徒歩で20分のポイントで、初夏にはカジカガエルの鳴き声が響き、渓魚のヤマメを釣ることもできます。50～60人が川に入って活動するのにちょうどよい浅瀬も多く、水生生物の隠れ家となる石や植物が程よくあるので、たも網ひとつでヨシノボリやアブラハヤなどを簡単に捕まえることができます。

3歳から釣り竿をもっていたそうです。段ボール箱を留める大きなホチキスを針の代わりにしてミカンの皮を付けて、庭の錦鯉を釣ろうとして怒られた記憶がうっすらとあります。小学生になると図書館から釣りの本を借り、仕掛けをノートに書き写したり、新聞の釣りコーナーの記事をスクラップしたりするほど熱中しました。

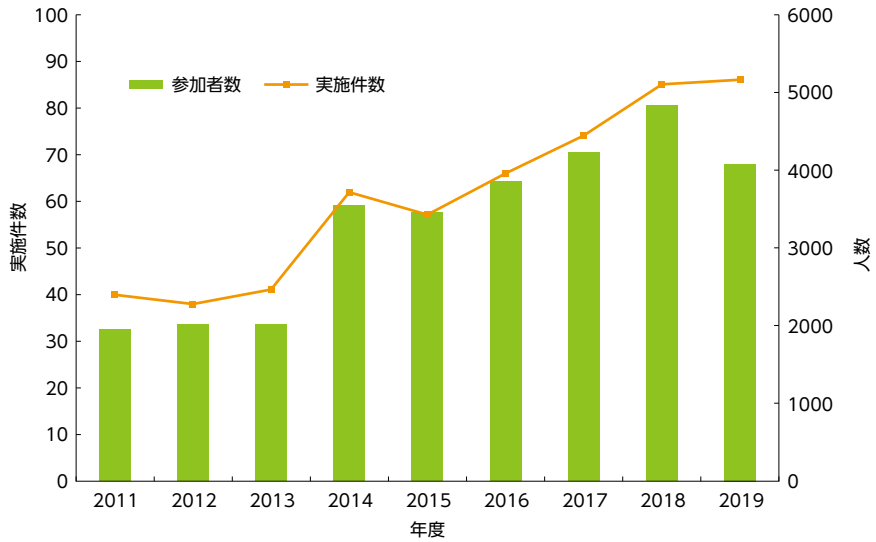
川に魅せられて

カワラバン 代表　菅原 正徳

何より前述の広瀬川中流域は、河岸段丘上にある市中心部のすぐ下を流れるため、川沿いに多くの小学校があり、学習のフィールドとしてのポテンシャルの高さがありました。

このような条件がそろっていなかったら、全く別の仕事に就いていた可能性が高かったと思います。

2011年1月にカワラバンを立ち上げ、次年度からの活動の準備を進めている矢先に未曾有の大震災が起こりました。一切の活動がストップすることを覚悟しましたが、いくつかの小学校や保育園が川での活動を希望してくださり、また沿岸部で被災した子どもたちのリフレッシュ事業をRACが中心となって企画してくれたこともあり、開店休業にならずに済みました。その後は順調に依頼が増え、年間延べ2000名くらいだった川の活動の受講者数が4000名を超えるまでになりました。（表活動実績）



仙台市には小学校等が外部講師を招いて学習する際に、必要な経費を市が負担する制度があるため、学校も外部講師を呼びやすく、また NPO も有償で支援ができるので、このような活動が積極的に行われています。

多くの場合、川の学習に取り組めるのは学校ごとのカリキュラムで決められた一つの学年のみです。いくら川が近くにある学校であっても、複数学年に渡って川の学習が行われるケースは稀です。ましてや中学・高校においては限りなくゼロに近いので、義務教育において一度きりの川の学習・体験活動を支援するという気持ちで活動しています。

年間200日以上ほとりに立つようになっても、わからないことが増えるばかりで、そして以前はキラキラしていた広瀬川も負の面ばかり気になるようになりました。足らざるを知ることは良い事とだとしても、何とかせねばと焦燥感に駆られて視野が狭くなっているようではいけません。特にコロナ禍で様々な交流が途絶え、新しい刺激が激減した今年はそのことを痛感しました。

「川と遊び、川に学ぶ、人を育む。」をミッションに掲げ活動に取り組んできましたが、まだまだ模索が続いています。川とのかかわり方の多様性を豊かにすることが、川や地域をよりよくすることにつながるはずです。色んなかかわりができる人を増やすために、今後も活動を続けていきます。

大きく曲がりくねって流れる広瀬川の最終コーナー付近。ここでの川遊びを楽しみにして、2km 以上の道のりを歩いてやってくる保育園もあります。

川に魅せられて

NPO法人 ダウン・ザ・テッシ　大内 雅司

屈斜路湖で SUP

川に学ぶ体験活動協議会発足20周年おめでとうございます。自分が生まれ育った名寄市は天塩川と名寄川にはさまれた街で幼少のころ父方の祖父に連れられ天塩川でヤツメウナギをとったり、母方の祖父に連れられヤマメ、ウグイ釣りをして過ごした記憶がいまでもあります。小学生になってもアカハラ、ヤマメなどよく釣りに行ってた記憶があります。今思うとよく川で遊んでいたなと。小学校高学年になり習い事をはじめ、徐々に川に行く機会が減りました。自分は看護師となり今から24年前当時勤めていた病院の副院長に無理やり地元の湖に連れていかれたのがカヌーを始めたきっかけです。

久しぶりにきれいな水や自然を味わい翌年には妻を説得し当時所有していたKAWASAKIのバイクを売りカヌーを買っていました。それから目的に応じたカヌーを集め、家族に言うと怒られるくらい所有することとなります。

初めて川に学ぶ体験活動協議会（RAC）と関わったのは平成18年のことです。その2年前に一緒にカヌーツーリングをしていた友人が転覆して亡くなるという事故がありました。それをきっかけにRACを知ることとなります。川で遊ぶことは自分にとって楽しい思い出しかなかったのですが、実際事故の体験があるとその思い出も色あせていきます。水に入るのも怖い時期もありました。ただ自分の贖罪としてこのような悲しい事故が起こらないように未然に防ぐような活動していこうと考えました。

当時受講したRACリーダー養成講座では危険予測、危険回避など、今のリスクマネジメント講座の内容が新鮮でその後どっぷりRACの活動に浸かっていくことになります。

RACの行っていることは我々が何事に対しても、臨機応変に対応できる生きる力を身につける入口としては最適だと思います。RACの専門講座を増やすにあたって水辺のファーストエイドを任されることになりました。これは自分にとって悲願でもあったことです。当時の日本の救急法や海外から入ってきた救急方法は都市型で、我々が普段フィールドにしている場所での救急法としては救命率を下げる事となりえます。2016年に救急法のＡＢＣがＣＢＡに変更されそのことがクローズアップされすぎたため溺水や引率することの多い子供にもＣＢＡを行うと誤解する人が増えていました。酸素の含まれていない血液をいくら循環させても脳に酸素は届きません。また、背面に板を入れたり、硬い地面でしっかり胸骨圧迫をすることが野外での救命率を高めると考えたからです。今、野外の救急法がいくつも海外から導入され、受講

地元幼稚園教諭の方々が参加しているリーダー講習会

者も増えていき、自分が考えた講座はあまり利用されていないのが現状ですがRACの関係者が正しい救急法を学ぶきっかけになったのではないかと思っています。自分は今後新型コロナウィルスの蔓延により救急法が変わっていくのではないかとも考えており、その変更の際にも誤解が起こらないよう皆さんには提言していこうと思っています。

今現在以前のように積極的に講座を開催したり会議に出席したりはしていませんが、天塩川や釧路川を中心にカヌーをして楽しんでおります。カヌー雑誌の取材のお手伝いをしたりして新しい友人が増えています。その輪が広がりRACのことを伝え新たなRACの仲間が増えるよう今後の展望を考えております。

天塩川オープンカヌーレース3連覇

幻となった「2020年」の大会ポスターです。
実際に200艇以上が一度に下ったことのある大会です。機会があればぜひご参加ください。RACリーダーを取得したレスキュアーが皆さんをお待ちしています。
（注：新型コロナの流行により中止）

川に魅せられて

日本大学理工学部まちづくり工学科　田島 洋輔

地域の笑顔を創る

利根川川下り活動（2019 年）

特定非営利活動法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）が設立20周年を迎えられたことに心よりお祝い申し上げます。また、協議会関係者の皆様におかれましては、河川体験やその支援活動の安全・安心を守るため日々ご尽力いただきまして心よりお礼を申し上げます。

まず、事務局より「川に魅せられて」というテーマをご提示いただき、これまで邁進してきた自身の活動を振り返るきっかけとなるとともに、「川の美しさ」という魅力はもとより、河川で出会った多くの「河川関係者」や「学校関係者」、「地域住民（加えて現所属団体の皆様）」とのつながりや、河川でつながった方々の屈託のない笑顔に魅せられて、仕事と河川活動の両立という大変な毎日を過ごせたのだと実感しました。このような機会をいただきまして本当にありがとうございました。

さて、私は、利根川上流河川事務所が居を構える埼玉県栗橋町（現久喜市）で生まれ、40年の歳月を利根川とともに生きてきました。特に幼少期には、昭和22年9月に関東～東北地方に甚大な浸水被害をもたらしたカスリーン台風の被災者である祖父母より当時の様子をよく聞かされていました。当時、大利根町（現加須市）で農家をしていた祖父母宅では、自宅近くの堤防（加須市新川通地区）が決壊したことで、自宅は床上浸水して屋根上に避難するとともに、農地や果樹園の浸水被害に加え、農耕用の牛や馬、果樹が流出するなど、立ち直ることが困難なほどの被害をもたらしたそうです。こうした当時の状況について、旧家に保管されていた上げ船などをみながら聞かされたことで、子供ながらに川の恐ろしさを体感していました。そう考えると、「川＝危険」という概念は、一般の大人たちよりも人一倍感じていたことと思います。

こうした私が、現在のように河川体験活動を展開するに至ったのは、河川体験学習の支援業務に携わったことがきっかけでした。当時は某総合建設コンサルタントに勤めており、その業務「利根川における河川学習推進業務」の一環として河川学習のすすめ・ヒント集の作成などを行っていました。この時期というのが平成18年度であり、川に学ぶ体験活動協議会がNPO法人化した翌年にあたります。

この業務において河川学習の普及を図るべく、利根川上流域全域の小学校を対象にモデル校（行政資金を導入した河川体験活動の支援事業）の依頼をしましたが、当時は「川＝危険」が浸透し、加えて小学校教諭の仕事量の多さにより、ほとんどの小学校が手を挙げてくれませんでしたが、たった一人「担任を持たない自分だからこそ

日本大学理工学部まちづくり工学科　田島 洋輔

村君小での支援活動を応援してくれた故柳瀬先生（2009 年）

実行できる」と手を挙げてくれました。その教諭「故柳瀬先生」の想いが、これまで15年間にわたって河川体験学習を展開している「羽生市立村君小学校」の初めの一歩を創ったのです。この出会いによって当該業務は大きく前進し、現在の私の活動方針を決定付けたといっても過言ではありません。さらに、当該業務では河川環境管理財団（現河川財団）やRAC事務局やトレーナーの方々と一緒に仕事することができ、この村君小学校での“出会い”が今日までの私の活動の動力源となっています。

さて、私の活動の中心を担う「村君小学校」について以下に整理しました。この村君小学校は、埼玉県北東部、群馬県との県境の利根川沿川に位置し、学校から河川敷までの直線距離が約200mと市内でも最も利根川に近接した小学校です。昭和57（1982）年からサケ稚魚の放流活動をはじめ、利根川との関係性が深い小学校となっています。周辺環境は、利根川や高水敷の広大なヨシ群落、これを生息環境とするカヤネズミやオオヨシキリ等の多様な生物種が生息する自然豊かな空間となっています。また、初夏には体長1mを超える巨大魚であるハクレンのジャンプが見られる特徴的な河川環境を有する地域です。

村君小学校では、平成18（2006）年に利根川上流河川事務所が推奨する「利根川河川学習モデル校」へ登録されたことを受けて、当時の学習指導要領（総合的な学習の時間）に従って「見つけよう広げよう村君の自然」をテーマとした利根川体験活動を展開しました。活動当初、多くの保護者の方には「川＝危険」という固定概念があったことから、利根川での課外授業への反対の声が大きく、こうした保護者意見を受けて、児童向けの「河川水辺の安全講座（座学・体験活動）」の開催に加えて、学校プール内でのPFDの着用体験や救助体験の実施などの様々な安全管理を徹底実施しました。こうした活動を展開したことにより、保護者の方々の安心感が高まり、利根川現地での活動許可を得ることができました。その後、「村君の利根川を発見するための現地見学会」や「Eボート利根川下り」、「川流れ体験」、自ら見つけた課題の探求を目的とした「自然環境調査（鳥類・水質など）」等の河川学習を展開するに至りました。さらに、その結果を「村君環境マップ」として取りまとめ、地域住民を対象とした「イキイキ村君フェスティバル（11月）」や北葛地区の環境展に出展する等、地域環境の情報発信を行ってきました。こうした結果、当時の担当教諭より「これまで河川は危険な場所と指導してきたが、今回の取り組みを通して考え方が180度変わった。安全性が確保されれば河川は教育的空間となる。」、児童や保護者からは「利根川川下りは村君小ならではの取り組みであり、毎年実施してもらいたい」等と高い評価をいただきました。

利根川のハクレンジャンプ（2009 年 6 月）

川に魅せられて

日本大学理工学部まちづくり工学科　田島 洋輔

羽生市でのワークショップ活動

とまぁモデル校として実践した段階で、ここまではできて当たり前な部分がありますが、ここからが「村君小」のすごいところです。翌年は、助成事業の終了に加えて、昨年度担当教員の異動が重なるなど、通常の小学校であればこの段階で河川活動が終了するというのが常です。しかし、同小学校では、河川財団からの助成金（河川基金）を受けて予算を確保するとともに、保護者から地域に根差した取り組みとして評価の高かった「利根川川下り」と、利根川上流河川事務所の「出前講座（水質調査）」の2つに絞り込むことで、“身の丈に合った河川学習”を展開するよう抜本的な見直しを図りました。この際、「利根川川下り」に関しては水辺安全性を担保できる専門家が近隣にいなかったことから「子どもの水辺サポートセンター」の登録団体「（株）栃木カヤックセンター」からボートと操船者（ガイド）の提供を受けることで河川学習の安全性を確保することを可能としました。また、助成金（河川基金）が採択されず、地域住民より評価の高かった「利根川川下り」が実施できない可能性が高まった年度には、村君小学校およびPTAが連携した廃品回収の実施などにより必要な予算を確保することで、この危機を脱してきました。これらのことから、村君小学校における「利根川川下り」は学校行事としてはもとより、村君地域の関係者からも後世への継続が求められ、守っていきたいと思われる活動へと深化したといえるでしょう。

以上のように、村君小学校では、大きな苦難を乗り越えながらも、「河川関係者」や「学校関係者」、「地域住民」が連携し、支えあうことで長期にわたり河川学習を継続実施してきました。さらに、こうした取り組みが「埼玉県」に評価され、埼玉県が展開する「平成30年度彩の国埼玉環境大賞奨励賞（代表：石川貴夫校長）」を受賞するに至っています。こうした河川学習（利根川川下りなど）は、計画当初予定していた「教育的効果（自然環境を通じて児童の心を育むこと等）」に加え、「利根川川下り」が「村君地域の誇り」へと発展してきたといえます。

このように、村君小学校では利根川を中心として集った熱い気持ちを持った「河川関係者」や「学校関係者」、「地域住民」のみなさんが、“次世代を担う子供たちの未来”という同じベクトルを持って活動を展開したことで、利根川の魅力を児童らに提供できたことや地域住民の皆さんに「地域の誇り」として認識されたこと、さらにはその魅力や誇りが地域へ波及し、当該地域や住民のみなさんの笑顔を作ってきたものと認識しています。

その後、自身の転勤で7年間の北海道への異動を経験しましたが、異動したその先においても留萌川（留萌ダム）や十勝川（札内川）、常呂川、石狩川、尻別川など様々な河川で多くの方々と出会い、そして、当該河川やその自然環境などに関する交流や情報交換などをさせていただきました。こうした経験を踏まえると、日本全国・世界各国どこに行ってもこうした河川ネットワークは強固に構築されており、そして、いつでもつながれるものであることを認識しました。

現在、私は、こうした羽生市立村君小学校での河川体験活動を通して学んだスキルや実績、関係者の皆様との絆を受けて、新たな環境まちづくり活動を展開すべく、前羽生市立村君小学校校長を会長とした任意団体「利根川の魅力を育む会」を設立し、羽生市と連携のもと、河川体験アクティビティ（川下りや魚とり等）のイベント化・事業化や河川敷クリーン作戦、さらには、ワークショップによる住民意見の抽出や利根川の活用方法の検討など実践的な環境まちづくり活動を展開しています。さらに、大学にて羽生市村君地区のような「魅力ある地域」を分析対象とした環境まちづくり活動の今後のあり方に関する“研究活動”を行っており、これら「実践」と「研究」を両輪により実効的な“環境まちづくり”について考え、これからも沢山の笑顔と出会えるよう努力していきたいと思います。みなさまご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

末筆ながら、川に学ぶ体験活動協議会の活動や同協議会関係者の皆様、また、これまでに同協議会を支え河川体験活動を幅広く展開されている河川関係者の皆様、さらには皆々様の恩恵にあずかり新たな芽吹きを持とうとしている地域住民の皆様に深く御礼申し上げるとともに、この20周年を節目として、川に学ぶ体験活動協議会のさらなるご発展を心より祈念申し上げます。

川が紡ぐ仲間達

NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク 理事長　土井 裕子

E ボート講習会

「最初のトレーナー講習会は、延岡の五ヶ瀬川だった」

RACと関わってもう20年にもなるのだろうかと思う。国土交通省が延岡に河川学習館「リバーパル五ヶ瀬川」を建ててくれていて、私たちもその管理運営をするためのNPOを立ち上げつつあった平成14年3月、五ヶ瀬川で川遊びのトレーナーを養成する講習会をしますので参加して下さいという御触れが回ってきた。「Be-Nature School」の長谷川孝一さんと森雅浩さんがやってきて、3泊4日間、参加者全員が泊まれて、近くに川のある会場を紹介して下さいという。行縢町にある延岡市少年自然の家を紹介し、川での研修場所として、五ヶ瀬川の岡本の河原などを案内した。

この3泊4日の講習に全て参加するとRACのトレーナーとCONEのトレーナー、レスキュー3ファーストレスポンダーの3つの資格が取れますという。何のことか分からなかったが、説明を聞いているうちに、私たちのNPO運営にも大切な資格である事は、なんとなく分かって、ガールスカウトやボーイスカウトにも声掛けをして欲しいと言われ、それぞれから3名が参加する事になり、私のNPOもすでに採用していたスタッフ1名がともに参加する事となった。

参加者は、全国から来ると聞いてびっくりした。さらにトレーナーの研修なので、参加者もそれぞれ何らかの講義かアクティビティを受け持つ事と言われて、私たちは、延岡のリバーフェスタで人気のダンボールで船を作ってレースをするというアクティビティを担当する事となった。

本当に全国から今思うと、すごいメンバーが参加していた。帯広の太田昇さん、当時は「カヌーライフ」の編集長だった藤原尚雄さん、ODSSの佐藤孝洋さん、当時はJpSARTの北川健司さん、人吉の迫田重光さん、事務局として、河川環境管理財団から藤芳素生さんと花田須磨子さん、全国水環境交流会から長倉庸子さんも見えていた。他にも全体で20名ほどの参加者だったと記憶している。途中国土交通省から金尾健司さんと佐藤寿延さんも見学にいらした。

この組織づくりのスタートは、全国の小・中学生11,000人以上に自然体験と道徳観・正義感について調査をしたら、自然体験の多い子どもほど、圧倒的に道徳観も正義感も優れていることという結果が出た。分母の数が多いので、信頼出来る結果だということになり、子供達にもっと野外体験をさせようと学校現場に働きかけたら、最も野外体験から遠ざかっていたのが学校現場だったという。子供達を野外に連れて行き、ちょっと怪我をしたらPTAから怒られ、教育委員会からは指導を受けるので、リスクのある活動から最も手を引いていたのが学校現場だったのである。

講習会

NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク 理事長　土井 裕子

講習会

そこで子供達にもっと野外体験をしてもらおうと文科省が外郭団体として作ったのがCONE(自然体験活動推進協議会：Council for Outdoor & Nature Experience)、その水辺バージョンで国土交通省が外郭として作ったのがこのRAC（川に学ぶ体験活動協議会：River Activities Council）。これは、「良い子は川で遊ばない」というキャンペーンを30年続けたことで、川から子どもの賑わいがすっかり消えてしまい、ややもすると国土交通省の河川技術者も日本の川で遊んだ経験が無いという反省の基、国の河川審議会の中で、川に学ぶ社会を作ろうと始まったことであるらしいということが、参加の中で分かってきた。現実には、すでにCONEの仕組みの方が先に出来上がっており、その中のCONE憲章の「自然体験活動」という文言をRACでは「川に学ぶ体験活動」に置き換えて全てのカリキュラムを組んでいたので、その連携の中で、RACの講習を受ければ連動してCONEの資格も取れることになっていた。

ガールスカウトの東京本部からは、若林千賀子さんというCONEのカリキュラム委員をしていた指導者も見えて、アイスブレイクと参加者を知るというワークショップをしてくれた。これも今まで気にしてこなかった事だったので、子ども達を束ねて行くスキルとして新鮮だった。この方は延岡のガールスカウトトレーナーの梶井恵子さんとも親しくそれで、しばらくの間は、延岡からは梶井恵子さんが、RACの理事を務めていた。

レスキュー3の講習会の実習は、3月の五ヶ瀬川の岡本の河原であり、非常に寒い中、みんなドライスーツを着て川に入り、頑張った。フェリーアングルを保って川を泳ぎ渡るという試験もあり、中洲にできた澪筋の10mほどの川を泳ぐのだが、あまりの冷たさに梶井さんが流され、3本目のスローロープにやっと助けられ、その後毛布をかぶって震えていたりした。全てが初めてのことで、とにかく1時間でも欠けたら資格が取れないとのことで、みんな寒い河原の中で、震えながらも必死だった。終わる頃にやっとやっていることの意味と全体像が分かってきた。

その後、この講習の大切さが分かって、平成15年、鹿児島から浜本奈鼓さんを迎えて、最初のリーダー講習会をした。平成17年度からは、延岡市が宮崎県から受けている「五ヶ瀬川ふるさと水回廊倶楽部」の事業費の支援を受けて、インタープリターの講習会も一緒に開催した。流域全体を使って、1泊2日を3回、阿蘇の山口久臣さんや北九州の板谷晋嗣さんなどにも来てもらって開催した。この時の泊まりがけ講習では、みんながとても仲良くなりその後の私どものカヌースクールにこの時の参加者が、スタッフとして応援してくれるようになり、今では独自でカヌースクールを開催する人も出てきて、互いに道具や人の貸し借りをしている。

RACの講習会も、毎年のリーダー養成会からスタートして、リーダーが増えた時点で、インストラクターやコーディネーターの講習会も開催した。この頃になると、講師も地元の仲間と、地元にいる様々な専門家にお願いしてできるようになり、それぞれが講義やアクティビティのコーナーを受け持ってくれるようになった。

そのうちにRAC本部の組織もさらに充実してきて、様々なマニュアルや安全のため資材・機材のレンタルや販売も増えて、ライフジャケットは割安だったこともあり、助成金を貰うたびに補充できたし、缶バッチマシーンなど、何度も貸し出ししてもらった。

総会や全国大会、フォーラムにも出かけるようになってきて、全国の川仲間と交流できるようになった。そこで出会った、NPO法人水環境北海道がやっていた「カミネッコン」というダンボールの枠の隙間に濡らして裂いた新聞紙を詰めた植木鉢に出会った。北海道では冬の寒さから木の根をかばうために植林に使うのだが、私たちが毎年開催していた「リバーフェスタ」のメイン行事であるダンボールで作るボートレース終了後の、一般ゴミで引き取ってくれない濡れたダンボールを、細かく裂いて

中に詰めて植木鉢を作り、花を植えて持ち帰るという仕組みが作れた。荒関岩雄さんの紹介で、この「カミネッコン」の販売をしていた「エバーライフ」の尾谷百合子さんから丁寧な指導を受け、何度も北海道から取り寄せをした。重さが1.2kgになれば植えても良いですよとのことで、秤を持ち込んで作業をさせると、子ども達にはゲームとなって、苦痛だった後片付けが、子ども達を巻き込んだ楽しい作業になった。

とうとう2014年には第14回全国大会を延岡で開催することができた。そのために前年の見附市での大会に延岡市の担当者にも行ってもらったのであるが、延岡大会にも全国からたくさん人が集まってくれて、実施には県や市、国土交通省からもたくさん実行委員を出してくれて、助けてもらった。国土交通省OBのRACの理事達が何度も延岡に足を運び、市役所や県、国の工事事務所などに顔を出して話をしてくれたのも、役所からの応援団を増やす大きな助けになった。

近年は、スタッフも一緒にRACの全国大会やフォーラムに参加するようになった。内容が充実していて、スタッフが参加したいと望むからでもある。参加する度に新たな発見があり、新しい知見を貰って帰る。SDGsについてもRACフォーラムでの情報が最初で、今ではスタッフがみんなSDGsのバッチをつけている。

カミネッコン

カミネッコン作り

NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク 理事長　土井 裕子

私たちのNPOの活動も19年目となり、取り巻く状況も随分と変わってきたと思っている。最初のトレーナー講習会で生まれた8名のトレーナーも、いつの間にか世代交代が進んで、若いトレーナーが増えてきた。みんな実力あるトレーナーばかりで、頼もしく思っている。若いトレーナーが育つのも、RACの組織そのものに魅力があるからだと思っている。

近年は水害が激甚化していることもあり、川で繋がる仲間たちが災害支援でも連携できるようになってきた。最初は2016年の熊本地震で「RAC救援隊支援ネット」が立ち上がり、多くの支援物資の搬送や、避難所運営にも携わったことによる。私のところも物資の中継基地となり、全国から集まった物資を熊本まで何度も搬送した。

災害を受けている現場では動きが取れないことも多い。被災地の近くに、支援基地ができると、被災地からの要望で、的確な支援体制を作ることができる。熊本地震の時は、水や紙オムツからスタートして、ダンボールベットやテントなどもたくさん届き、スタッフが何度も運んでくれた。

今年は球磨川の氾濫で、人吉や八代に大きな被害が出て、やはり中継基地となったが、新型コロナウイルス感染防止のため、他県ナンバーの車が熊本県に入れなくなり、県境まで熊本のRAC仲間に取りに来てもらったりしたが、最後は宅急便で送ることになった。

被災地の求めている物資は時々刻々と変化する。それらも現地のRACの仲間から細かく連絡が入り、素早い対応ができている。

最初は「川に子どもの賑わいを」のスローガンの基、安全で楽しい川遊びのマニュアル化や川遊びの指導者を養成するところからスタートしたRACだが、近年は遊びのサポートだけでなく、リスクマネージメントやファーストエイド、レスキューなどより安全対策に特化した講習会が増えててきている。

そしてさらに災害時の支援にも大きな力を発揮している。これも川で繋がる信頼し合える仲間が全国にいることと、的確な指令を出せる事務局があること、川や水辺での活動に必要なスキルや機材を持ったメンバーがたくさんいることなどに、支えられているからである。こんな信頼し合える「川仲間」と組織とを、20年の活動の中で紡げたのは、素晴らしいことだと思っている。

川が紡ぐ仲間達

NPO法人 川塾北九州　内村 政彦

紫川に乾杯（第 17 回川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州）

RAC の旗が翻るサマーキャンプ in 紫川（2008 年）

1. 市民の批判をあびる

市役所に「何だ、こんな川つくって草刈りやゴミ拾いが大変でしょうがないぞ。」こんな電話がよくかかってくるようになりました。「多自然型川づくりが基本となりましたので、自然の草が茂っていて当たり前なのです。」そのように返答すると「それは役所の勝手だ、ここは夏になるとラジオ体操や、水遊びする場所だから草が生えないようにコンクリートで固めてくれ。」とのお言葉。そこで「昭和の高度成長期にコンクリート化された川は無味乾燥になってしまい、現在はそのような川づくりを行ってきた反省で、護岸などを土や石で作るようになったのです。子供たちの感性や情緒性を高めるためにも自然の川がよいのです。」そんな講釈をたれると「馬鹿たれ、だれが草を刈りや清掃しているのか解っているのか！」と叱られてしまうことが続きました。

このような叱責に嫌気がさし、川づくりは自己満足でしかないのか…?と悩みましたが「よし、川をつくるより、人をつくる仕事をしよう」と立ち上がったのです。

2. 川をつくるより人をつくろう

２００１年４月１６日、宮城県石巻の『ひたかみ水の里』の新井さんのところに北九州から３人で会いに行ったのです。その日のことはハッキリと覚えています。まず、北上川下流河川事務所に行ったのですが、なんと国の事務所の中に『ひたかみ水の里』の団体事務所があるのです。船外機付ボートも浮桟橋に係留され、活動場所や施設も充実しているので唖然としました。国土交通省なら出来るけど、地方都市でここまでできるだろうか。

新井さんからの助言で「まず、川の団体を作りなさい。」と言われ、直ぐに石巻の居酒屋で団体を結成しました。ですので『川塾北九州』発祥の地は北九州市ではなく宮城県石巻市なのです。

団体はできたが、会員はいないし場所もなし。何から始めようか…試行錯誤がそこからはじまりました。

“役所の職員を育てるだけでなく、市民を育てよう。”そう思い付き、先ずは川へ安全に誘える人を作るため『紫川水先案内人育成事業』を始めたのです。７回の講座を修了すれば、水先案内人の免許証とライフジャケットが貰え、楽しいバスツアーもありますと市民の心をくすぐり、講座に誘いました。

『川に学ぶ体験活動』の理念から始まり、安全講習、川という自然の理解、カヌーの基礎技術、流域の源流探検、よその川を見に行く等、RACリーダー講習に似ていますが、時間がすごくかかる講座でした。毎年１５名位の参加者があり、その中から『NPO法人川塾北九州』のメンバーも生まれ、育成事業は１０年間も続けることが

出来たのです。10年目には、蒔いた種が実ってきたと感じました。行政主体から、卒業生が主体となり運営する時期となり、『リバークラブ紫川』が誕生したのです。

その後、10年の間にリバークラブの仲間により市内のカヌー体験や川の自然体験活動が充実していきました。

3. 川の自然体験を通して「生きる力」を育む

「昨今の青少年の問題は規範と生命力の欠如が原因であると言われています。その臨床的対処方法は、規範と生命力を強制的環境の中で『生き方』の根本的自立トレーニングを行うしかないと言う事です。その理念は『生きる個体』が自らの生命力で生きようと模索する環境をつくり、その中で死を恐怖し、ひたすら生きようとする生命力を試練し、みずから生きたいという願いを蘇らせることにある」と風の便り編集者の三浦清一郎氏は言っています。

『紫川大冒険』も市の事業として始め、（長年続けることはなかなか難しく、7回目と8回目は『RACサマーキャンプin紫川』としてRACの支援を受けて開催となりました。）平成20年の8月「水を巡り・自然を知り・強くなろう」のキャッチフレーズで参加者を募りました。

流域の最高峰の福智山頂に露営し、源流から一歩も離れず紫川を下り、海を渡り、無人の浜でキャンプする6泊7日の水の循環を知る大冒険。そしてこの厳しいトレーニングに、最初に参加した一人、吉本源一郎。ニックネームはゲンゲン（その母とは、川仲間の深い絆で結ばれていくことになります）。

ゲンゲンは昨年から京都の病院に勤めていますが、10年ぶりに親子で会いに来てくれました。凛々しくなったゲンゲンに質問してみました。「あの時の厳しい自然体験は生きるために役に立っていますか？」しばらく考えた後「一人暮らしにすんなり入って行けました。また、どんな患者さんにも不思議と話しかけることができてコミュニケーションが図れています」「中学時代に難病を罹ったときも、落ち込みそうになる自分を『生きる力』が支えてくれました」と、期待通りの返答をしてくれました。

そして母親の奈津子さんは、紫川水先案内人の卒業生でもありました。彼女は、水環境館で行っているカヌー体験の大切な協力者です。川仲間の手助けでカヌー体験などのイベントが安全に開催することができて、本当にこうべが垂れます。

20年前に川の種を蒔いていてよかったなあ。

4. 最初の種まき

平成13年10月に岡山県の旭川で『第1回川に学ぶ体験活動全国大会』が開催され、役所の若手職員が行ってくれました。大会から帰ってきての第一声、「第2回目を北九州市でやりますと手をあげてきました！」唖然としましたが、言った以上二言は許されない…。「よし、やるぞ」と意気込んだものの、それまでRACとの関わりや河川財団、国土交通省との関わりが無いので「どこの何者がしゃしゃり出たんだ」という感じでしたが、何回かRACの会議に出席し、時間をかけ了承を得られました。また、実行委員会を立ち上げるのに北九州周辺の団体に声をかけ、20団体の協力を得られ実行委員会を作ったのです。北九州方式らしい全国大会にするため数十回の実行員会を開きました。ある夏の会議には国土交通省の佐藤寿延さんが来北され「斜に構えずRACに入会したらどうですか？」と誘われたこともありました。

水の循環を知る最終地に到着（RAC サマーキャンプ in 紫川）

艱難辛苦の協議を経て、参加体験型の大会を実施し好評であったことを思い出します。交流会は紫川に架かる勝山橋の上に屋台を設け全国の川の団体から食材を取り寄せ、各流域の郷土料理を楽しみました。北海道から送られてきた鮭の「ちゃんちゃん焼き」を肴に夜は更け…。平成14年10月に「第2回川に学ぶ体験活動全国大会in北九州」を無事に終えることができました。この実行委員会を結成したのが最初の種まきだったと思います。

平成29年10月には、2回目となる全国大会の開催を依頼されたので引き受けることにしました。北九州で二回目の種まきとなる「第17回川に学ぶ体験活動全国大会in紫川」を実施できたことに感謝します。再度、川仲間のつながりを深めることができるとともに、新しいつながりが出来ました。2回目は、各実行委員が自ら考えて動いてくれたので私の負担は軽減され、分科会において石組み魚道を作成することができたのです。遊泳魚のために実際に機能する魚道が完成し、前回の全国大会では成せなかったことができました。これなら、3回目を行えばもっと良いものができそうです。

RAC サマーキャンプ in 紫川（2008 年）

第17回川に学ぶ体験活動全国大会 in 北九州

5. そう思えばそうなる

SOSの法則。「S」そう「O」思えば「S」そうなります。口癖です。人にも伝えています。

20年でどうなったか。“カヌー艇庫が出来た。ボートやSUP、カヌーがずらっと並んでいるではないか。水上ステージは2箇所もある。それにもちろん、川の団体の基地として水環境館がある。”人々が気軽にきてカヌーに乗れ、それをサポートする仲間がいて、20年前に「北上川で見た感動」を今、実現することができています。

水環境館の目的は「川に学ぶ社会」を目指すことです。20年前、河川法に環境が追加され、河川文化交流施設として産声をあげ、やっとその目的を果たせるようになってきています。『SOS』を私は経験をもって言えます。「RACの旗がホールに掲げてある」「ライフジャケットキャンペーンの幟も翻っている」「大画面には川の安全の動画が放映されている」思い描いたシーンが目の前にあるではないか！と。そう思えばそうなる、と。

特定非営利活動法人 緑の風　浅野 純一

川のプレーパーク　岐阜県大垣市からの便り

1. 団体紹介及び主たる活動

私たちの団体は、2011年から大垣市のシンボル的な存在の大垣城二の丸跡にある大垣公園でプレーパーク事業を市から受託して現在に至っています。そこでの活動内容は子どもの居場所造り、子育て世代の交流の場、観光案内、自然体験活動の推進等です。来園者の便宜を図るため、年中無休で活動しています。管理事務所のような存在ですが、施設管理よりソフトウェア提供に重点を置いています。尚、市からの要請は大垣公園だけでなく、他の都市公園も対象にする事になっていて、他でも数か所、期間限定で実施しています。

2. 川のプレーパークについて

（1）大垣市の自然環境

大垣市を取り巻く地理的自然環境は、岐阜県の南西部に位置し多くの河川に囲まれた輪中地域にあります。濃尾平野の構造は東が高く、西が低いので木曽川、長良川も平野部に入ると大きく西に流れを変えています。日本中の多くの都市にみられるように大垣市も洪積平野に位置します。縄文海進（19,000年前頃）の頃の濃尾平野の海岸線は海抜5mで現在の大垣駅あたりが波打ち際だったと聞いています。

戦後の高度経済成長期の土木技術の目覚ましい発展のおかげで東海道新幹線、名神高速道路の開通などもあり、旧来の低湿地は多くの排水路の整備で効率の良い

大垣公園プレーパーク

豊かな農地や企業進出を促しました。ちなみに、市内を流れる一級河川は市のホームページによると揖斐川を筆頭に21河川になります。つまり、川の中に大垣市があると言ってもいいくらいです。

（2）川のプレーパーク概要

川のプレーパークの活動のねらいは、夏休み当初の、いわゆる梅雨明け10日の安定した天候を利用して、川遊び三昧の場所を提供して親子を川に戻す事です。そして、この地で自然体験活動をするのなら、川に尽きるというのが20年以上の自然体験活動の経験による私の持論です。大垣公園プレーパークの経験から平日はいつ来ても活動できる水辺の居場所の提供と、休日は自然豊かなフィールドを活用して冒険的要素の高い移動形ツアー、『ハックルベリー・フィンの冒険』体験編の2本立てで構成しました。

2019年の予定した日程は、以下の通りです。

日付	曜日	概要	実施場所
7月20日	土	川下りツアー	杭瀬川　塩田橋～野口橋
7月21日	日	川下りツアー	杭瀬川　野口橋～養老大橋
7月22日～26日	月～金	川のプレーパーク	杭瀬川　塩田橋下流右岸 杭瀬川公園周辺
7月27日	土	川下りツアー	牧田川　多良峡～一ノ瀬
7月28日	日	川下りツアー	水門川　水門～牧田川出合
7月29日～8月2日	月～金	川のプレーパーク	杭瀬川　塩田橋下流右岸 杭瀬川公園周辺
8月3日	土	川下りツアー	揖斐川　揖斐川大橋～ 馬の瀬防災センター
8月4日	日	川下りツアー	同上

当団体が所有する機材は、ラフトボート1艇（主に荷物運搬）、インフレイタブルカヤック3艇、SUP10艇と大人用ライフジャケット30着、子ども用ライフジャケット60着です。この中にはセブンイレブン基金を活用して購入したライフジャケットも含まれています。

（3）定着型川のプレーパーク実施概要

活動場所は木曽川水系杭瀬川の塩田橋下流右岸です。幸いな事に都市公園の杭瀬川公園に隣接しています。大垣市にはこの公園でのプレーパーク活動を目的とし

杭瀬川のガサガサ体験

揖斐川下り

た活動を目指して申請し、後援を頂き正式に川のプレーパークと名乗り、市に報告出来るようになりました。

（4）川下りツアー概要

原則、親子参加にしています。そうすることでスタッフは全体の安全対策に専念できます。1日がかりの体験になるので、お弁当と水分補給用の水筒を持参してもらいます。みんなでギアに空気を入れ、ライフジャケットの着用、ラッコのフローティングポジション、レスキューロープを使った救助体験をしてから思い思いのギアを使って川下りを楽しみます。

ギアの中ではSUPが一番人気です。不安定な乗り心地や落水の楽しさを知ると後はやり放題です。SUPの場合、子どもでも落水してもすぐ乗り込みが出来るので安心感があるようです。

杭瀬川の場合は友人の川漁師に途中で待機してもらい漁の成果のウナギ、ナマズ、テナガエビやモクズガニを見て川の豊かさを体感してもらいます。

尚、この活動の揖斐川2日間は市内のおやこ劇場さんと、環境市民会議が主宰する環境まるごと探検隊の貸切で実施したことを書き加えます。

3. 事業評価及び今後の課題

先ず、この事業に助成頂いたセブンイレブン基金にお礼申し上げます。2017年は杭瀬川公園が改修中で使用できなく、水門川で定着1週間と短くなりました。2018年と2019年は上述したように定着2週間でした。開催回数と参加者数は次頁の通りです。

	2017年		2018年		2019年	
	定着	ツアー	定着	ツアー	定着	ツアー
回数	7回	3回	10回	4回	9回	4回
参加者数	44人	57人	66人	61人	154人	95人
スタッフ	22人	19人	24人	13人	22人	12人
雨天中止	0回	0回	0回	2回	1回	2回

地元の新聞にも取り上げてもらったり、参加者の口コミ等で回を重ねるにつれ参加者が増えてきました。同時に、運営方法も定着時のレンタル倉庫の導入や地元のお寺でトイレや手洗い場所を確保できるようになりスタッフの労力も削減する事ができるようになりました。これらのノウハウの積み重ねが今後に生きてくると思います。

但し、参加料は子どもが何とか工面できるようにと、1人500円と設定したので、プロスタッフ等の謝金、定着時のレンタル倉庫、ツアーで使うトラック等の借料、広報活動の宣伝材料等は到底賄えません。その為、セブンイレブン基金を活用させてもらいましたが、資金確保は重要な課題です。

4. 最後に

私の個人的な話ですが、今から50年以上の前の大学紛争のピーク時に大学山岳部を中退した理由は、アマゾン川下りの野望でした。しかし、それもかないませんでした。それ以外にも幾多の挫折を感じながら人生を送ってきましたが、人生を大きく変えたのは1988年の長良川下りのイベントでした。そこでの興奮やワクワク感は私の心の中に小さな希望の光となりました。この様な体験を皆に伝えることが私の使命かと思いました。

川に入ることを怖がっていた女の子が翌年には、小さな子の手を取り川の中に案内しているのを見たとき、川のプレーパークをやっていてよかったとつくづく思いました。

そして、生まれ故郷の大垣でいくつまでこの仕事が出来るかなとも思いつつも、子どもたちの歓声が川の中で響き渡ることを夢見ています。

最後に、この事業を支援して頂いた大垣市都市施設課、国交省揖斐川第2出張所、長源寺さん、専門講師陣、そして、安全対策に徹してくれたスタッフの皆様にお礼申し上げます。

川が紡ぐ仲間達

NPO法人 帯広NPO28サポートセンター　千葉 利光

はじめに

当法人は平成11年に法人化しました。その頃から積極的に川の活動を行っており、その実績が評価され、平成16年に北海道エールセンター（現エールセンター十勝）の管理運営を委託されることとなりました。

その後、川での体験活動が法人活動の主軸になり現在に至ります。特定非営利活動法人という民間が学校をメインとした河川活用の推進を行うことには様々な課題がありました。今回はそれらの活動をご紹介いたします。何かしら皆様の活動のご参考になる点があれば幸いです。

活動の目的

河川環境の課題として、不法投棄や水難事故などがあります。しかしこれらの課題について決定的な解決法がないのが現状です。当法人は教育からのアプローチを行っています。具体的には不法投棄を抑制するための意識向上や、水難事故防止のための知識、意識向上を図るためには地域住民にそれらの知識等を提供する必要があります。しかしながら「不法投棄抑制フォーラム」や「水難事故防止フォーラム」などを開催したとしても、地域住民が参加してくれる可能性は低く、不法投棄や水難事故について知識等を広めるという目的においては有効ではありません。

Eボート体験（十勝川水系帯広川）

そこで「楽しい」をキーワードに川での楽しい体験を行うことで多くの地域住民に参加してもらい、参加者が楽しんでいる間に、いつの間にか不法投棄についてや水難事故についての意識が向上しているようなコンテンツをつくり、地域住民に川での体験ができるチャンネルを増やすことで、不法投棄の抑制や、水難事故防止のための知識・意識を一人でも多くに届けることができます。

それにより、より良い河川環境の実現を目指すことができます。時間は非常にかかると思いますが着実に効果を上げることができると私達は考えています。

以上が当法人の河川での活動の目的になります。

活動の実施体制

活動の実施については帯広開発建設部や帯広河川事務所などの河川管理者や企業、河川財団や十勝エコロジーパーク財団、十勝管内の小中学校、市町村教委、帯広畜産大学のカヌー探検部、教員経験者やその他一般のボランティアなど、本当に多くの方々に支えられ活動を継続してきました。

例えば平成28年の台風ではメインのフィールドが破壊されてしまいましたが、その際には河川管理者や企業の皆様と連携を図り、フィールドの修復を行い、無事活動ができるようになったことや、学校での河川教育の展開については、教師経験者の

川探検　川流れ（十勝川水系札内川）

NPO法人 帯広NPO28サポートセンター　千葉 利光

働きがあり、十勝の小中学校へ円滑に河川教育が定着したり、実際の活動については帯広畜産大学カヌー探検部やその他一般のボランティアの協力が非常に大きな力になりました。また、平成17年当時Eボートのマニュアルがなく貸出時等にトラブル等があったため、河川整備基金助成事業の助成を受け、マニュアルの作成を行いました。

このように十勝では多様なステークホルダーとの連携ができており、そのことが活動の継続に寄与していると言えます。

コンテンツの特徴

当法人は平成17年より「主体的に体験できる川での活動」を開発してきました。これは受動的体験と比較すると主体的体験のほうが効果が高く、活動の目的を達成しやすいからです。

例をあげると「川流れ」と「川探検」の違いがあります。「川流れ」が受動的、「川探検」が主体的活動と私達は位置づけています。

当初、十勝で行われていた「川流れ」は上流と下流にスタッフを配置し、子どもたちは列をつくり順番を待ち、一人ずつ上流側のスタッフが子どもを流し、下流側のスタッフが受け止め、流れ終わった子どもは列の最後尾に並ぶ、これを時間まで繰り返していました。「川流れ」については人気のコンテンツであり子どもたちは川に親しみ、多くの学びを得る機会となります。しかし、いくつかの問題点が見えてきました。

川探検　川流れ（十勝川水系札内川）

●一定数川を流れたくない子どもがいる

これは、川流れに固定した活動の場合、拒否反応を示す子どもが一定数いるため、この活動では十分に主体的に参加できない「やらされている感」を感じながらの受動的な体験になってしまうという問題点です。川での楽しい活動を通して不法投棄や水難事故防止の知識・意識を高めるという目的を考えると効果が低くなってしまうと私達は考えます。

●待ち時間が発生する

一人一人流すために、子どもたちに待ち時間が発生してします。これは貴重な体験時間ということを考えるとロスになります。

●水温が低い場合辛い

北海道では夏季でも水温が低い場合があり、川流れ自体が辛いと感じる子どももいます。

これらの問題点を解消するために開発したのが「川探検」です。川探検は決められた範囲、時間、ルールの中で自由に川流れ、ガサガサ（網を使用した魚とり）、水切り、その他を体験するコンテンツです。子どもたちは自分の興味の対象に常に向かう主体的な体験が可能になります。

例えば川探検における川流れは、子どもたちが何人でも同時に川流れをすることができ、待ち時間の解消に繋がります。いきなり川流れから始まることに抵抗のある子どもは、ガサガサや水切りの体験をしつつ、楽しそうに川流れをしている友達を見て

川探検　ガサガサ（十勝川水系札内川）

いるうちに、自分でもしたくなり、自然に川流れに合流しているケースが多く見られます。また、水温が低い場合でも、体験自体がガサガサや水切りがメインで、元気のいい子が喜んで川流れをしていたり、ガサガサで大きな魚がとれたときなどは、川流れをしていた子どもたちもガサガサの魚がとれた子どもの周りに集まるなど、「川」と「子ども」の世界が構築されていきます。

「川探検」では子どもたちが常に自分の興味の対象と向き合うことで、質の高い体験が可能となるのです。

しかし「川探検」を実施するためにはスキルの高い安全管理者や適したフィールド、水量などの条件をクリアする必要があります。

当法人のコンテンツのもう一つの特徴は“オリジナリティ”です。川に多くの方々を呼び込むためには、オリジナリティの高い魅力的なコンテンツが必要であり「十勝ナイトリバークルージング」はこれにあたります。このコンテンツは観光分野に参入する際に、パートナーの企業と共同開発したコンテンツで、帯広川を約2km、夜にEボートで川下りを行うものです。夜の川下りということで安全面の懸念もあると思いますが、帯広川のコースは安全管理上問題がなく、参加者は心地よい暗闇と静寂の中、非日常的なリラックス感を味わうことができ、晴れていれば星空を楽しみ、冬期は白鳥を水上から間近に見られるなど、非常に好評なコンテンツです。その結果、数々の受賞や、マスコミに多数取り上げられるなど、このコンテンツがなければ川に来ない道内、道外、海外の多くのお客様や地域住民もあまり注目していない帯広川を訪れるきっかけとなっています。

シュノーケリング（十勝川水系札内川）

ナイトクルーズは、観光分野のコンテンツであるため、ここでの売上はゴミ拾いや学校支援の資金になっています。また多くの観光客が訪れることで、地域住民も帯広川の価値を再認識することで不法投棄の抑制につながることも期待しています。

以上のように魅力的なコンテンツを開発することで、多くの方々が川を訪れる仕組みを構築し、不法投棄や水難事故を防ぐために知識、意識の向上を図っています。

最後に

近年災害が多発しています。川での様々な体験活動を子どもたちに提供することは防災上も非常に有効です。「川探検」で子どもたちは楽しむと同時に様々な課題を解決しており、その課題は一人で解決できるものと仲間と協力して解決するものに分類できます。例えば一人で解決できる課題としては、川流れ中に止まってしまう子どもは川を観察し、流れをみて、自分の身体に適した流れを見つけ流れようとします。仲間と協力して解決する課題としては大きな流木を流そうとしたが重たくて動かせない場合、仲間を呼び協力を要請し、それでもなかなか動かなくて試行錯誤しながら、川に流し、達成感を味わったり、Eボートではイメージ通りに直進できない場合、グループ内でディスカッションし、どうしたら直進するのか考え実践しています。このような経験を子どものうちにすることは、不測の事態に協力して対応する力を高める訓練になります。このような経験がある子どものいる地域と、そうでない地域では防災力に差が出ると私達は考えています。

川に親しみ、不法投棄や水難事故を防ぎ、地域の防災力を高めるために、私達はさらに「楽しい」、さらに「魅力的」なコンテンツの提供をこれからも継続していこうと考えています。

素敵な水辺の見つけ方

仁淀川清流保全推進協議会　石川 妙子

波川水辺の安全教室

私たちは仁淀川というすてきな川と共に生きています。「仁淀ブルー」と呼ばれる清流であることで流域外にも知られるようになりました。国土交通省が発表する一級河川の「水質が最も良好な河川」にも選ばれています。

流域には豊かな自然も残っており、川で遊ぶ人たちも多くいます。仁淀川清流保全推進協議会ではこの豊かな清流を未来を担う子どもたちに受け渡していきたいと考えています。そこで「川に子どもを呼び戻すワーキンググループ（以下W.G.）」を立ち上げ、子どもたちが川に親しむ活動を行っています。

RACの講師を招いて「子ども水辺の安全教室」を開催しています。また、地元のNPOやW.G.のメンバーによる「水辺の生きもの教室」、「パックテストによる水質調査」、「川のごみ問題を考える授業」などのプログラムを実施しています。

仁淀川は流路延長が124kmと長く水質的には源流から河口まで泳いでもまったく問題のない川ですが、子どもを集めて安全に実施できる場所というのは目的を踏まえてしっかり下見をして精査したうえで決めなければなりません。また、仁淀川流域は公共交通を利用するには不便なところなので、自家用車の駐車場の確保も必要になります。一人なら秘密のすてきな水辺は数多あるのですが…。

まずは安全第一。「水辺の安全教室」では川流れができる水量があり下流にはエディがあり確実に上陸できる場所、流れの強さを体感したり安全に川を歩く方法を

波川水辺の安全教室

知るための、流速はある程度早く浅い場所があれば理想的です。仁淀川流域では波川親水公園での安全教室開催回数が最も多いです。安全教室に参加した人はライフジャケットの大切さがよくわかると思います。川の見えない危険も知ることができます。川での悲しい事故や怖い経験を防ぎ、楽しい記憶を積み重ねていってもらえたらと願っています。

波川親水公園は車でのアクセスがよいことや駐車場が広いこともあり、RACリーダー養成講座や生きもの探し、仁淀川国際水切り大会等の各種イベントにも利用されています。

次に、生きもの探しは多くの種類が捕れて最終的には「楽しい！」気持ちが残れば成功です。川好き生きもの好きの子どもを増やせます。多くの種類の生きものを見つけたい探究派には支流がお勧めです。支流は子どもを見守ることができるコンパクトな範囲内に多様な環境がそろっており、そこに適応した多様な生きものが生息しています。知らない生きものにたくさん出会えたら楽しくなります。一方、本流下流部では川が大きすぎて子どもが採集できる範囲はどうしても単調な環境になってしまいます。ただ、たくさん捕りたいハンター派であれば下流部でもテナガエビやカニ探し、ゴリ釣りなど楽しむことができます。

生きもの探しですばらしいと思ったフィールドは佐川町立尾川小学校校舎の裏の

素敵な水辺の見つけ方

仁淀川清流保全推進協議会　石川 妙子

仁淀川

尾川川。ツルヨシが多く茂るようになってきてはいますが、生きもの探しの時は前もって先生方が草を刈っておいてくれます。校舎の裏のはしごを下りるとそこがフィールドです。周囲は里山の風景が広がっており、当然生きものの種類はとても多いです。今年はホタルの幼虫も捕獲できました。

その他にも学校とフィールドの近い支流は勝賀瀬川、柳瀬川、土居川、小川川、長者川など枚挙にいとまがありません。中山間地の小さな学校が多いですが、自分たちの地域の川が宝物であるということを子どもたちは実感して顔が輝きます。

中上流部の支流と違い下流部の支流は仁淀川の後背湿地を流れており、勾配が緩いため河床には泥が多く足を取られることも多いため初心者は川に入ることはためらわれます。しかし、岸からタモ網でヤゴを探したりトンボの観察をするのに適しています。湧水の多い場所にはベニオグラコウホネが群生する場所もあり、子どもたちは地域の宝として観察会や発表会を行っています。また、後背湿地に立地している建物や道路、農地は浸水災害にあうことも多く、防災教育も盛んに行われています。

ところで、仁淀川流域はどこもピカピカにきれいかというとそうでもなく、河口には上流から流れて来たり波に打ち寄せられたりするゴミがあります。波川親水公園にはレジャーゴミが多いので休日明けには定期的に清掃がされています。このような場所はゴミ問題を考えるフィールドとして使えます。仁淀川清流保全推進協議会の「美しい景観を保全するW.G.」に素晴らしい人材がいるので、講師を任せています。ゴミが景観を損ねている現場を見て「捨ててはいけない」と思うのは当然ですが、そこから一歩踏み込んでどんなゴミが多いか、どうすれば流域でゴミを捨てる人がいなくなるのかなどを考えてもらうことが大事だと思います。ただし重い気分で帰ってもらうのは本意ではなく、ゲームを交えたりして楽しみながら現実を知ってもらうようにしています。

波川水辺の石切り

すてきな水辺はどんなことをしたいか目的がしっかりしていれば見つかるはずです。仁淀川流域は気持ちのいい水辺がそろっていますが、どの流域でも必ずあるはずです。普段から流域をうろついていれば目的別のすてきな水辺を思い浮かべることができるでしょう。

もし知らない流域へ行くなら、危ない場所をまずチェック。現地に注意喚起の看板や電光掲示板があれば必ずしっかり読んで守ってください。川は流れや地形の変化が激しいので、去年大丈夫だったからといって今年安全とは限りません。水位が50ｃｍ増すだけで流速が驚くほど増します。地元の人の注意は聞いてください。注意してくれるおんちゃん（高知県の方言でおじさん）は長年その場所で危ない目にあっている人を見ているので黙ってはいられないのです。注意されたら素直に従って、「どこかいい場所ありませんか」と聞き返してください。とっておきの場所を教えてくれるかもしれません。

あなたの活動拠点となる水辺を探してください。そしてあなただけのすてきな水辺も見つかるといいですね。

素敵な水辺の見つけ方

NPO法人 鶴見川流域ネットワーキング　中原 優人

日本には、素晴らしい透明度の高い渓谷、アユの群れが泳ぐ清流など全国に素敵な川が流れています。人々を癒やし、心を和ませてくれる川、それは自然豊かな川だけでなく、人々の生活の拠点であり、自然が少ないと言われる足元の都市部においても、実はちゃんと存在しています。ここではそんな都市部を流れる川、いわゆる都市河川にスポットを当て、その魅力や比較的アプローチしやすい水辺の場所など、流域に多くの人が暮らす都市河川であり、私が鶴見川流域ネットワーキング（略称TRネット）のスタッフとして活動している鶴見川の水辺も例にあげながら紹介します。

都市河川に近づくポイント：まずは整備された親水施設を探してみよう

河原のある川であれば水辺に近づくのはカンタン。でも都市河川の多くは両岸が切り立ったコンクリート、転落防止の金網や柵が設けられムズカシイ。実はアプローチできる場所が少ないのですね。しかし近年こういった川でも水辺に親しめるよう行政や自治体を中心として親水スペースが設けられるようになってきました。都市河川へ近づく第一歩として、まずは整備された親水広場などの施設を発見し、活用してみましょう。

鶴見川では流域思考に基づいて課題解決を行う鶴見川流域水マスタープラン（略称水マス）の施策（水辺ふれあいマネジメント）の基に、関連する各地域の河川管理者により、簡単な親水階段から広い敷地を持つ防災拠点まで大小様々な親水施設が整備されています。TRネットの参加団体が活動する場所では管理作業や生きもの調査が行われ、行政が整備した拠点を市民が、安全安心生きものいっぱいの魅力ある場所に磨いています。

都市河川に親しむポイント：景色を楽しみ、川辺の自然とふれあおう

都市の中は自然が少ない、そう思う方は多いでしょう。実際、川も人工構造物が多いので、一見自然がなく、魅力的に見えないかも。でも土のある河川敷には多くの生きものが暮らしています、コンクリートの護岸でも土が堆積してくると、草や木が生えて生きものがやってきます。外からは見えにくい水の中も魚やエビ、カニ、貝などが住み、実は都会の川でもいろいろな生きものが暮らしていることに驚かされます。

景色も都市河川の魅力の一つです。川辺を散策するだけで季節ごとに違う景色を楽しめ、そこには都市河川でしか見られない景色もあります。さらにカヤックやボートなど舟に乗るとまた違った川の姿を見ることができます。

TRネット事務局のある横浜市港北区綱島は多くの人が暮らす都市部ですが、そこを流れる鶴見川の川辺に足を運べば、ガマ、アシ、オギ、ノギク、ナノハナの仲間などを筆頭に四季を通して多くの植物たちが川辺を彩り、訪れる人や通行する人々を楽しませてくれます。草原にはバッタやキリギリス、チョウ、トンボなどの昆虫の仲間たちが暮らし、子どもたちが生きものとふれあう格好の場になっています。堆積した土のある場所ではカニの仲間のクロベンケイガニやベンケイガニたちの見られる場所でこのカニたちは湿った土に穴を掘って巣を作り、水に入ることは稀で陸上で見る事ができるので、小さなお子さんでも安全に近づくことができます。ピーク時には電車が絶え間なくやってくる東急東横線の鉄橋下の岸辺でも見られます。カニが活発になる夏はカニ釣りも面白い遊びの一つですね。

もちろん川の中には魚を始め水に住む生きものが暮らしています。「えっ？水質が悪くて魚なんかいないんじゃない？」というのは昔の話です。下水道が整備されるにつれ鶴見川の水質は劇的に改善され、多くの生きものが帰ってきています。都市部を流れる川でもたくさんの魅力があります。

都市河川での注意点

その1：川の体験はRACリーダーや市民団体のイベントを活用しよう

ただし都市河川は安全な場所が少なく、入ること自体が危険な場所がほとんどです。川の特性を理解し、活動する川を熟知して安全な場所や方法を知っている川の指導者と一緒でないと危険です。こんな時はRACリーダーの出番ですね。都市河川でもいろいろなイベントが行われていますが、RACリーダーが携わっているイベントに参加するのも川の魅力を体感する一つの方法です。

鶴見川でもリーダーの資格を持ったTRネットの参加団体・スタッフのサポートにより川に入って行う生きもの観察や野外学習などのイベントや体験活動が流域各地で行われています。生きもの観察では安全に配慮しながらの楽しい活動の中、参加する子どもたちが体験する魚やエビ、カニの仲間、ヤゴなど普段なかなか目にすることのない生きものたちとの出会いは驚きの連続です。見守る大人も巻き込んで新たな川のファンが次々と誕生しています。

その2：ゲリラ豪雨と急な増水に注意

都市河川では大雨が降るとすぐに増水します。これは流域の多くの家屋がアスファ

ルトなどで覆われ、排水された雨水が下水道を伝ってすぐに川に流れ込むためですが、特にゲリラ豪雨と呼ばれる短時間に降る激しい雨では、支流など中小河川の場合「あっ」という間に数メートルも急激に増水することがあり、流される危険があります。また大雨が降った後は普段と違う状況になっている事が多いので、水辺に近づく場合には、上流の天候に注意をはらい、予報などで雷雨や豪雨がありそうな時、また増水時は近づかないようにしましょう。なお、川に入る場合や落水の危険がある場所ではライフジャケットの着用が必須です。

簡単ですがここまで都市河川の魅力を紹介させていただきました。都市部を流れる川でも魅力的な川は多くあります。足元に流れる川があれば、ぜひその魅力を発見してみてください。

鶴見川の親水施設はこんな場所

●市が尾水辺の広場

上流域を管理する神奈川県によって整備された親水施設で、安全に川に近づくことができるようにスロープと階段護岸が設けられています。広場側は浅く、休日には家族で訪れる人の憩いの場になっています。

イベント時の様子

●鶴見川河口干潟

築堤の際に河口に残る干潟を保全し水辺とのふれあいの場として国土交通省により整備された親水広場です。水際の貝殻や石の下にはカニ（タカノケフサイソガニ）が多く、小さな子どもも水に入らずに生きものとのふれあいを体験することができます。

鶴見川下流、綱島の川辺

紹介しているのは東急東横線綱島駅から徒歩5～6分の大綱橋から上流約700mにある早淵川合流点までの間の高水敷（河川敷）です。堆積土による寄り洲や高水敷の広い草地など多様な環境があり、散歩やジョギング、ピクニックなどで多くの人が訪れています。

一時期特定外来種アレチウリにより壊滅したオギなどの在来植生を復活させるなど、川辺の植生管理を一部TRネットが行い、市民、地域、企業の協力も得ながら素敵な川となるよう活動を続けています。また大綱橋下の寄り洲（通称バリケン島）では月1回クリーンアップや水辺での活動（新型コロナ対策により現在は休止中）を行い、季節によってはボートも利用した活動を行っています。

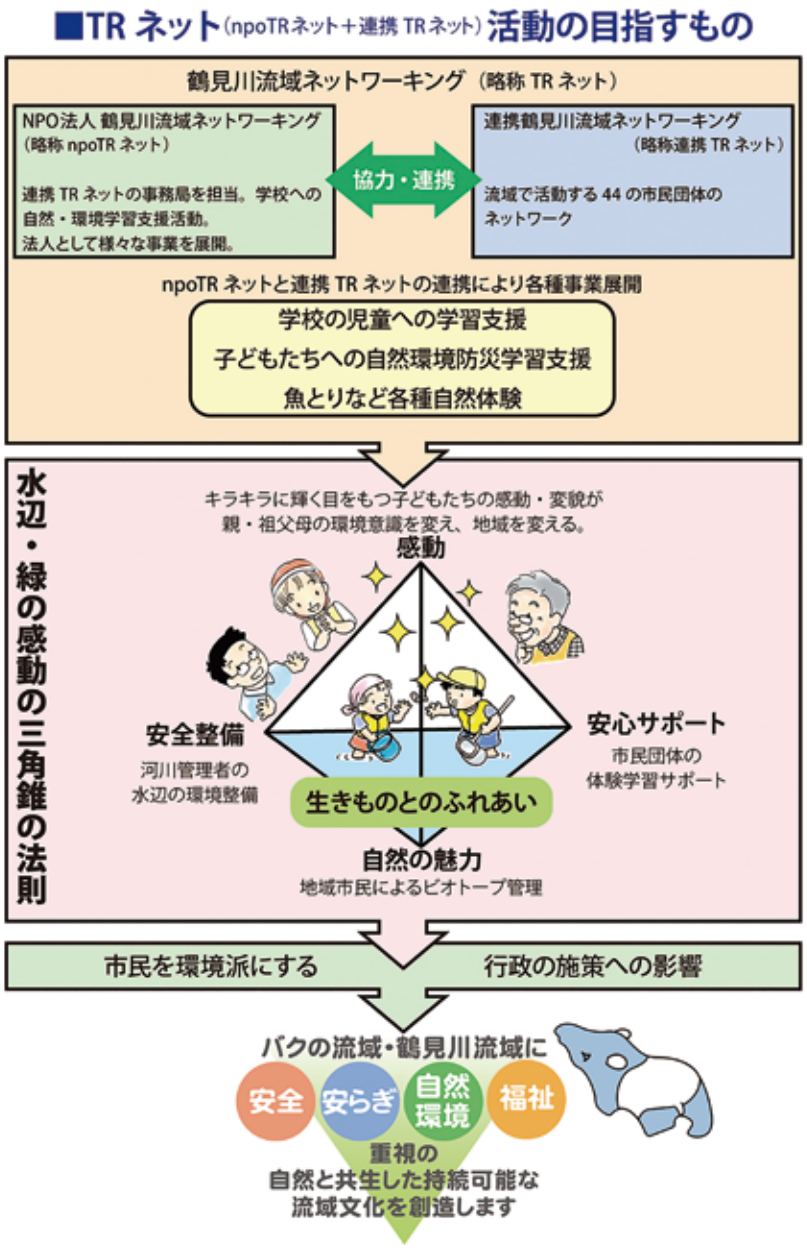
鶴見川河口干潟

NPO法人 鶴見川流域ネットワーキング　中原 優人

TRネットの紹介

鶴見川流域ネットワーキング（TRネット）の活動は、バクの姿の流域地図を共有しながら流域規模の市民連携をすすめ、≪安全・安らぎ・自然環境・福祉重視の川づくり・まちづくり≫をとおして、持続可能な未来を開く新しい流域文化の育成を目指すし、流域市民団体の交流・連携活動（ネットワーク活動）で現在46団体が参加。拠点では流域を意識した流域学習支援が行われています。学習支援では小学校3～4年生（10歳前後）を焦点とした「感動の水辺三角錐」（右図参照）の考えを採用、その狙いは ①河川管理者に安全な親水広場を整備していただき ②TRネットが定例的持ち場として自然や景色の魅力を磨き ③そこで安全な活動・学習の機会を提供し、招かれた子どもたちが水や緑や生きものたちとの出会いに感動し、深い学びを体験する。その体験が同席する教員、保護者、市民にも共鳴し、地域の環境文化育成にも貢献していくことです。

TRネットが、市民、企業、行政の応援、協力を得ながら川辺の自然植生の保全・回復・創出を進める綱島の川辺



素敵な水辺の見つけ方

NPO法人 しりべつリバーネット　南 重光

ランラン公園で残雪のニセコ連峰をバックにカヌースタート

川での自然体験活動を行うにあたり、場所選びはとても大切な要素だと思います。安全で楽しい自然体験活動ができる場所にはいくつかの条件があります。例えば、周囲に危険なものがないか？自然環境は良好か？アクセスしやすいか？など。私たちはカヌーを使った自然体験活動を行なっていますので、車で川のそばまで行けることも重要な条件ですし、川からの景色も大切だと思っています。それら全てが揃う素敵な水辺が、我々しりべつリバーネットが拠点にしている尻別川にもありますので紹介したいと思います。

尻別川は北海道の道央圏西部に位置する後志地方を流れる全長126kmの一級河川です。源流は千歳市の支笏湖西側にそびえるフレ岳（標高1046m）で、そこから6市町村を流れ日本海に注ぎます。国土交通省が毎年実施している一級河川対象の水質調査（BOD値）では、平成21年から10年連続、通算18回「水質が最も良好な河川」に選定されており、魚影も濃く緑豊かで北海道を代表する清流の一つと言えます。夏場はヤマメ、ニジマス、アメマス、イワナ、鮎、などが釣れ、春にはサクラマスやヤツメウナギ、秋にはシャケが遡上します。また、日本最大の淡水魚イトウの生息南限の川でもあります。川での自然体験活動も盛んで、中流域ではラフティング、下流域ではカヌー、釣りは全域で楽しめます。尻別川は、蝦夷富士とも呼ばれる羊蹄山(1898m)の麓をぐるりと取り巻くように流れているので、上流域から下流域までのほとんどの区間で、雄大な羊蹄山の姿を仰ぎ見ることができます。中流域では、左岸側に羊蹄山が、右岸側にはニセコアンヌプリ（1307m）を主峰とするニセコ連峰を望めます。尻別川はその名の通り「シリ・ペッ」（尻別川の語源、アイヌ語で山の川の意）なのです。

その尻別川で、我々が主に「川に学ぶ自然体験活動」を行うのは、蘭越町のランラン公園です。河口から約23kmの位置にある全長1.2kmの河川公園で、その内の500mが階段状の護岸になっており、安全に川まで降りることができます。また、川際まで車が入れるので（要許可）、カヌーや用具、機材の運搬に便利な場所です。護岸の階段は渇水期で10段、踏み面が長く、蹴上が低いのでカヌーも置けますし、物を運んだり置いたり、座ったりと便利に使えます。活動内容の説明を行うときは、階段に参加者が段々に立ち、指導者が川の中から話をしたり、デモンストレーションをしたりとすると全員に行き届きます。

階段の前は水深も浅く流速も低いため、川に入って行う活動もしやすいです。夏の渇水期なら対岸の中洲まで歩いて渡れるので、ガサガサや箱メガネは自然度の高い中洲側で行います。中洲の反対側に回り込めば更に自然度の高い環境となります。

「川の流れ体験」は階段側（左岸側）で行います。川から上がった子供たちは走ってスタート地点に戻り、また流されていきます。浅いので大人は川底にお尻を打ちますが、小さい子供は足がつくので怖がらずに体験できます。下流側は緩い右カーブになっていて、子供達は階段側に流されてくるので安心です。

川の流れ体験

素敵な水辺の見つけ方

NPO法人 しりべつリバーネット　南 重光

それでは、本日（2020年8月22日）NPO法人しりべつリバーネット主催、北海道栽培漁業振興公社協力で実施した、「子供の水辺安全講座」の内容を紹介します。

実施時間：10：00～11：30
場　　所：ランラン公園下流部付近
参 加 者：蘭越町の幼小中高生
参加人数：26人
実施内容：

1. 受付後ライフジャケット配布、諸注意の後「川の歩き方講座」。
2. 川の歩き方になれたら、中洲へ「川渡り体験」。
   （幼稚園児はカヌーに乗せて渡った）
3. 中洲周辺の水辺で箱メガネとガサガサ体験。捕まえた生き物はバケツで保管。
4. 公園側に戻り、捕まえた生き物を水槽に移して、北海道栽培漁業振興公社スタッフによる投網のデモンストレーション。（ヤマメ、鮎、ウグイなどがかかった）
5. 水槽の生き物を解説（北海道栽培漁業振興公社スタッフ）
   本日の獲物はヤマメ、鮎、ウグイ、ハナカジカ、カンキョウカジカ、カワヤツメ（幼魚）、ウキゴリ、ニホンザリガニ、スジエビ、モクズカニ、カワシンジュガイ、カワニナ、ヘビトンボ、ヒゲナガカワトビゲラ、ヒラタカゲロウ、ミズカマキリ。
6. 安全な川の浮き方、流された場合の対処などデモンストレーションを交えて紹介。希望者のみ川の流れを体験。
7. まとめ、終了解散。

1時間半の講座なので、各体験は短時間になりますが、それが肝です（理由は後で）。短時間のガサガサなので獲物が少ないことも想定して、前もって捕まえていた川の生き物を水槽に入れておいています。投網は2ヶ月前に申請し許可をもらっています。幼稚園児の川渡りは難しいので、緊急時のために用意していたカヌーに乗せて「渡し船」を行いました。あまり川を知らないスタッフも、「フェリーグライド」が理解できたようです。

今年初めてミズカマキリが取れました。きれいな川にはいないはずの生き物で、少しショックです。

毎年大人気の「川の流れ体験」ですが、盛夏を過ぎた尻別川の水温は低く、本日は気温23度、水温15.5度！という条件で、川の流れ体験にチャレンジしたのは26人中6人だけでした。これが、各体験時間は短い方がいい理由です。ずっと川に入っていたら、水が冷たくて足が痺れてきます。川に入って20分で川から上がる、陸で説明を聞く、少し温まって再び川に入る、の繰り返しがいいのです。子供たちは普通にTシャツ短パン、素足にサンダルですから。今年は新型コロナウィルス感染症の影響で、7月下旬に行なっていたこの講座も規模を縮小した上で、8月下旬に延期になりました。賑やかな夏のランラン公園も今年はひっそりとした感じです。相変わらず釣り人は多いですが。

ランラン公園の紹介は以上です。興味を待たれた方は是非遊びに来てください。機会があれば他の川の「素敵な水辺」も知りたいと思います。今年の尻別川は鮎の食み跡が半端なく多いし、バイガモがめっちゃ増えています。もっとたくさんの人に教えてあげたかったです。来年はコロナ不安が払拭され、いい時期に思いっきり川遊びができるようになればと祈っています。

北海道栽培漁業振興公社スタッフによる川の生き物の解説

川の流れ体験

素敵な水辺の見つけ方

くりこま高原自然学校　塚原 俊也

北上川川下り

「川には子ども時代に経験してほしいすべてのことがある」と私は思います。子どもたちは川遊びを通して様々なことを経験し成長します。川流れ、滝つぼジャンプ、カヤックなどの冒険体験で自己肯定感や自信がつきます。危険だと言われる川の危険性を正しく知り安全に遊ぶことを考え行動することで安全教育になります。魚を捕りナイフでさばき、焚火を起こして料理することで生きる力が養われます。川での楽しみや美しさそして山と海をつなぐ川の役割を経験し理解した人は、いつまでも美しく楽しい川を残したいという環境教育の場にもなります。

RAC指導者として川遊びを通して人が育つ場を用意するには川の活動に適した水辺を探す必要があります。

くりこま高原自然学校では以下のことを考えて活動に適した水辺を探します。まず前提として子どもや参加者にどんな経験や成長をしてほしいかという活動のねらいを決定します。そのうえでねらいを達成するための活動場所の選定に入ります。①水辺へのアクセスや活動環境（車両のアプローチと緊急時のエスケープ、トイレの問題、休憩・着替え場所など）②水量水質（活動期間中の水量の安定度、水質を汚染する要因や施設が上流部にないか）③遊びの可能性と安全管理の方法（どんな遊びができるか、自分たちの安全管理能力の範囲内か）④地域や他の利用者との関係性（そもそも遊んでいい水辺か、釣り師や他の利用団体との距離間、地域住民の理解）などです。

そうした自団体なりの条件をクリアしたり折り合いをつけられた場所を私たちは利用しています。

例えばくりこま高原自然学校周辺では栗駒山山域でのイワナ釣り、シャワークライミング、沢遊びが楽しめます。プログラムで使用するときは上記の条件にあった沢を選んで活動しています。

他には宮城県栗原市花山にある砥沢です。ここは花山ダムの上流にありシャワークライミングや滝つぼ遊び、イワナのつかみ取りなど渓流での全身を使った遊びが楽しめます。沢沿いに林道もありアクセスも良く入渓退渓点が豊富です。水量も安定していて水質もきれいです。すぐ近くには国立花山青少年自然の家もあるのでファミリーや団体での宿泊を伴う活動も可能です。過去にRACでも「森水キャンプ」という被災地支援プログラムでも利用しています。

次に北上川です東北一の大河で流れは緩やかですが、ある程度の経験があれば最長190km程度の長距離の川下りができます。水の透明度には少々難がありますがラフトボートやカヤックを使ったパドルスポーツをする上では問題となる水質ではありません。岩手県盛岡の四十四田ダム～宮城県石巻市の北上大堰まで下ることができます。（北上大堰もポーテージすれば下流も下って海まで出られます）さらに北上川は水辺プラザという船着き場と水道、トイレや駐車できる広場などが何箇所も整備されているので川下りがしやすい環境といえます。アクセスも川に平行して国道4号線や車道があるので車両でのサポートもしやすいです。

最後に岩手県の和賀川上流の西和賀町弁天島周辺をご紹介します。ここはコンパクトなエリアに様々な遊びの要素がある場所です。川の右岸には駐車場・トイレ・水道のある公園がありアクセスも良いです。遊びの種類も豊富で小さな子～大人まで満足できるフィールドがあります。ただ弁天島という中洲のなかでは殺生してはいけないという地域の習わしがあるのでその点はご注意を。

花山砥沢千代滝

和賀川弁天島

河川教育は郷土を愛する心を育てる

学校連携部会長　関西福祉大学大学院教授　金沢 緑

広島県切串小学校（学校リーダー講座）

1.すべての子供に河川教育を

日本の小学校は、地域と密着した校区に立地しており、そこには多くの場合、河川や湖沼、水路があります。これらの場所は、昔は子どもたちの通学路であり、遊び場であり、故郷の四季や歴史を身近に感じることのできる自然豊かな場所でした。近年、里山は住宅地となり、農地の減少による畦や水路など水辺環境が減少しており、水辺に近づく機会が減ってきています。

さらに、川辺には「よい子は川に行きません」との立て札があったり、学校では川遊び禁止の指導がされています。これら、危険であるとの認識は、河川が未処理の産業廃棄物などで汚染されていた高度成長時代から変わっていません。現在は、環境基準に適合した処理水が排出されており、川の環境は浄化されているにもかかわらず、なのです。

そんな中でも地域団体の活動に参加する子どもたちは、川遊びや自然体験の大切さを理解している保護者に勧められて得がたい体験をしています。

このようにすばらしい水辺体験をすべての子供に体験させるためには、学校で河川教育を取り入れた教育を推進することが急務です。

2.河川の教育的価値

河川教育を取り入れている学校では、川に出かけて生き物と出会い、水の美しさを感じ、川の流れの力や不思議さを感じさせることができます。子どもたちの身近な自然である川の体験を多く取り入れ、地域の自然への理解を深めることが、自分の住んでいる地域のよさを意識させることになり、自分の生まれ故郷でなくても、地域に愛着を持つ子どもを育てるのです。小中学生は10年後には社会を担う青年に成長します。義務教育9年間における河川教育は、10年後の社会における自然観、防災観、育児観に大きな影響を与え、郷土を愛し守ろうとする心を育てる教育であることは間違いないでしょう。

3.河川教育で育まれる児童（ここは少し専門的です）

河川教育で重要なことは、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図ることです。地域を素材とした独自のカリキュラムを作成し、川と理科、生活科、そのほか学校の特色にあわせて関連できる教科や領域を決めて、総合的な学習の時間のカリキュラムに反映させ、継続して取り組むことです。

各教科で育成する資質能力

① 生活科では気づきを重視します。諸感覚を用いて川の生き物や自然事象、水そのもの等へアプローチし、見つける、くらべる、たとえるなどの活動を行いながら、驚きや生命への畏敬の念などの気づきを引き出すことができます。言語面では、形容詞や副詞・オノマトペ、メタファーなど実感を伴った言語力を身につけることができます。

② 理科では、問題解決の資質や能力を培います。3年生では比較する力、4年生では変化の要因とその関係を、5年生では川の環境の諸条件を勘案しながら生物の生息の様子について計画的に実験や観察を行う能力を、6年生では調べたことをもとに多面的に考える力をつけることができます。

熊本県八千把小学校（学校リーダー講座）

③ 総合的な学習の時間では科学的な物の見方考え方(資質・能力)を身につけるねらいを持ち、環境がどのような要因で変化するか、比較や関係づけという能力を養いながら学年・発達段階に応じて考える力を育成することができます。

学校連携部会長　関西福祉大学大学院教授　金沢 緑

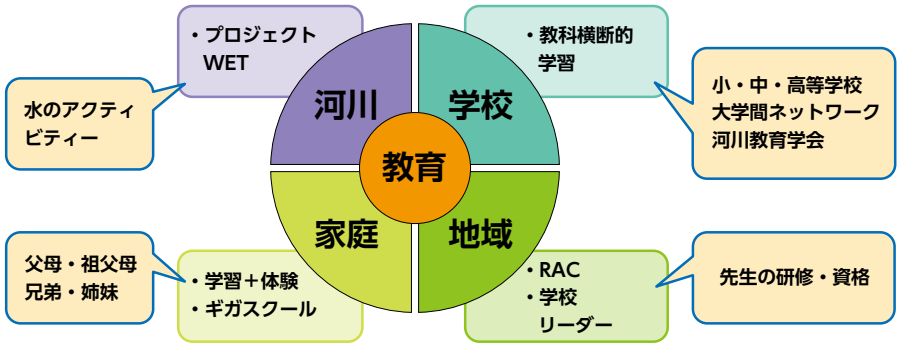
4.「川遊び」と「川学び」の融合

●RAC学校連携部会

地域団体の河川活動は、ガサガサ、ごみ拾い、カヌー、Eボートなどを中心に「川遊び」が展開されています。長年行われてきた「川遊び」と学校教育過程に組み込まれた「川学び」を融合するため、RACに2012年に「学校連携部会」ができました。

●河川教育の連携イメージ

知識は体験することで「つながる」、「ひらめく」、「腑に落ちる」ものです。



RACは、流域の歴史・風土・自然・生活・文化等をとおして、水循環を担う川で学ぶ諸事項を理解させ，「川に学ぶ」という理念のもと、川及び水辺での継続的な体験活動とそれを支える「川の指導者」を育成することなどを活動目標としています。その理念は、感動する心を大切にし、川への理解を深め、川や水辺を大切にする気持ちを育てることです。

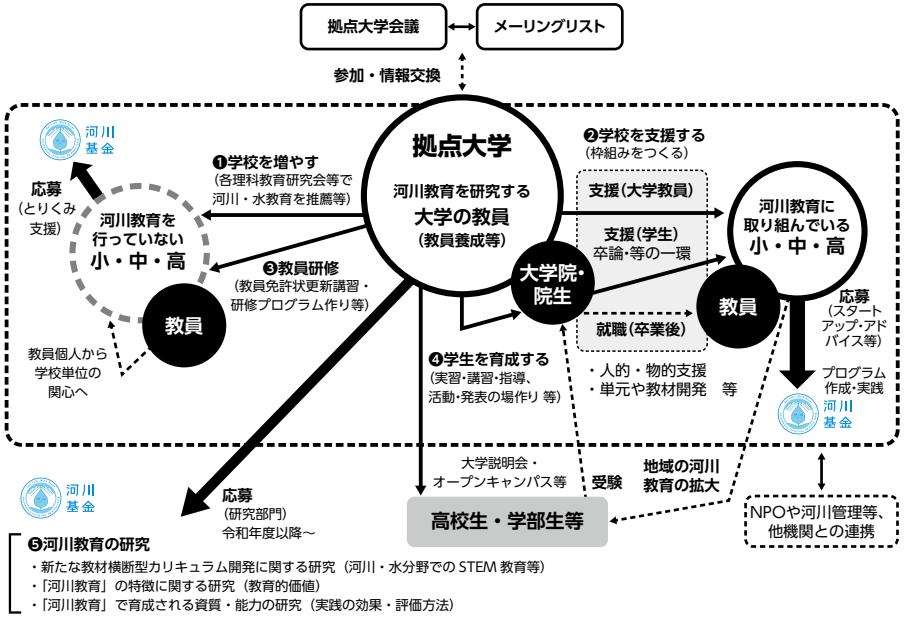
しかし「川遊び」と「川学び」の融合はなかなか難しく、地域団体の方からは「学校教育は敷居が高い」、先生方からは「遊びでは教科学習にならない」と、双方から問題があがりました。そこで、学校連携部会では、地域団体には「学校連携コーディネーター」、先生方には「学校リーダー」の育成をすすめています。しかし、学校での河川教育は、中心的に推進する校長や教員の異動で中断することが多く、継続的に河川教育を行うことが難しいという問題もあります。そんな中、学校連携部会では、学校連携コーディネーター養成講座、学校リーダー育成講座を開催し、川の体験を通して安全を学ぶ体験講座と、プロジェクトWET エデュケーター養成講座を組み合わせて教科内容に関連させる工夫を盛り込み、河川教育と連携したアクティビティーを開発するなど、地域の活動家や大学と連携して活動を進めています。

●大学間ネットワーク会議

すべての子どもたちに河川教育を継続的に届けるためには、異動の少ない大学の先生が指導者となって取り組みを行っていく仕組みが必要となり、2016年に大学間ネットワーク会議が発足しました。2020年には全国22大学が参加しており、同年には日本河川教育学会を発足させました。会員として、河川教育を研究又実践を支援する個人又は団体を募集しています。お気軽にご参加ください。

（連絡先：sciencemidori@yahoo.co.jp）

各拠点大学を中心とした活動の全体図



「水辺といきる」これからのまち

一般社団法人 環境文化研究所　田中 謙次

地球の約70％は海であり、美しい「青い惑星」の源は「水」です。水は、山地を削り平野を形成するなど、地球の骨格となる地形を今もつくり続けています。源流から平野に流れる川は岩石や土砂、更には栄養分を下流へと運ぶことで文明をつくり、人々に生きるための叡智と恩恵を与え続けてきました。その後も舟運や漁など生活や経済の基盤となり、港では経済交差点や異国との交流によって先進的な地域経済が発達してきました。水辺で発展してきた文明はこれまでもこれからも人間の文化や社会を未来へ継承する、「流れる資源」そのものなのです。

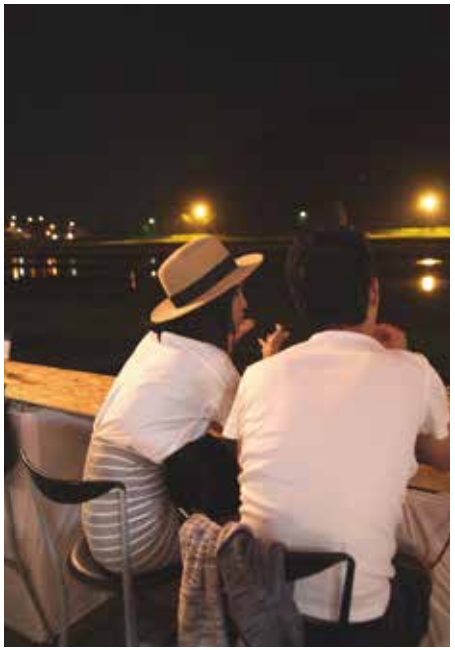
かつて人々は、里山や里川といった自然と共に生きてきました。そこには、生活に必要な資源や食料が豊富にありました。自然の恵みは時とともに変化しながら現代まで文化をつないできました。戦後、自然から遠のく生活に変化し、大量生産、豊かな生活などを求めた高度経済成長期には、有害物質が混じる汚染された水辺が全国へと広がっていきました。自然と共に何万年も生活してきた人間が、戦後わずか数十年で自然への関心が減ったことで地球に大きなインパクトを与えはじめたのです。

平成も中盤に差し迫ったころから、人々の物質的価値観に変化が現れてきました。モノよりコト、プライスレスへの移行です。それまでの物質欲から、経験や体験にこそ真に価値があると認識し変化してきたのです。学習指導要領で「生きる力」、「体験教育」、「アクティブラーニング」などが盛り込まれたことも、時代の流れとフィットしています。第二次ベビーブーム生まれの私が過ごした幼少期は、遊びといえば野球やかくれんぼやビー玉など限定的であり、汚れた川で遊ぶことはありませんでした。しかし、最近ではキャンプ一つとっても昔とは志向が異なり実に楽しそうでおしゃれです。水辺でもラフティングやSUPなど体験の幅が広がって、アクティビティの多様化が進んでいます。

水辺にテーブルを出すだけで憩いのエリアへと変貌する（日野川）

海外では水辺のアクティビティは日本より日常的で、ヨーロッパでは水上のレンタル自転車のようにカヌーが提供されています。朝食前の静寂な水辺をゆったりとカヌーが進んでいく様子は情緒的で眺める人にとっても癒される風景です。

日本では、生産や物流だけでなく、生活、ビジネス、情報発信を含めた多様な都市活動の場として水辺を利用した開発が進められてきました。1980年代からバブルが崩壊するまで「ウォーターフロント開発」が東京や横浜をはじめ全国で展開されました。コンビナートのようなイメージが強かった水辺で、生活や暮らし、さらには新たな商業拠点が生まれてきたのです。他方で、1990年に「『多自然型川づくり』の推進について」が国土交通省の推薦で、河川の生物の生息・生育環境及び美しい自然景観の保全・創出が始まりました。しかし、治水機能と環境機能を両立させた事例をまねただけの画一的な「型」の展開は、多自然とはほど遠いものでした。その後、2006年には地域の暮らしや歴史・文化との調和にも配慮した「多自然川づくり（※型がはずれた）」へ変遷し、よりオリジナリティーのある自然が用いられるようになりました。また、下水道や集落排水が水源集落にまで整備されたことで河川の水質は



グラスを傾けながら艶やかな夜へと（日野川）

一般社団法人 環境文化研究所　田中 謙次

飛躍的に向上していきました。その結果、この頃からこれまで三面張りで関心を向けられなかった河川に、集い楽しむ人たちが増え始めてきたのです。

私が住む福井県には、夜叉ヶ池（南越前町）を源流とする日野川（全長71．5km）が福井市へと北流しています。2000年より活動を進める任意団体「日野川流域交流会」は流域で活動する約50団体のネットワーク組織です。活動当初より進めてきた「サクラマスの駅伝」プロジェクトは、落差工がバリアとなって遡上できないという問題を、駅伝のように流域団体が協力しあって解消していこうと、魚道の改修提案などを行ってきました。2009年に発足した砂礫河原の復元を目指した「日野川に砂礫河原をとりもどす会」プロジェクトは、砂礫河原を観光資源として、まちおこしの機とする活動でもありました。アユの手づかみやEボート体験などが楽しめるイベント「そうだ！川に行こう！」は、交流会の活動や水辺への関心を高めるためにスタートさせ、最大4，000人が清流を楽しみました。水辺でビジネスを展開してみようと2012年に始まった「おしゃれなリ・BAR」には、これまで水辺に来なかったおしゃれな若者が大勢押し寄せ、せせらぎと音楽とお酒に酔いしれました。翌年には、おしゃれなリ・BARの活動を推進させる「リバビズ大学」プロジェクトを立ち上げ、水辺でのエコノミー（ビジネス）で少子化と定住化対策を解決することをテーマに活動を進めました。おしゃれなリ・BARはその後全国に知れ渡ることとなり、それまでの水辺×オープンカフェから、水辺×BARという大人的で色っぽいスタイルへと突入するきっかけとなりました。この流れは、地域限定的ではなく、2011年の「河川占用許可準則改正」や、2013年の「河川協力団体制度」発足、さらには「ミズベリング・プロジェクト」のスタートなどと時期を同じとしています。やがて、人々の関心やニーズは水辺へと注がれていくようになり、現在、水辺の特性を活かしたまちづくりが全国の流域で始まっています。

水辺ストリートのテントは連日混みあっている
（ニューハウン）

ポートランド（米国オレゴン州）は、働く、住む、遊ぶ、買い物をするなど、複数の用途をあえて混在させて賑わいを創出する。ミクストユースのまちづくりとして世界中から注目されています。最近ではこのようなまちづくりによって、まちを楽しみながら生きる人々が増えてきています。日暮里にある「HAGISO」は旧家をゲストハウスやカフェへ変換させ、訪れる楽しさ、住む意味を感じるまちとしてリノベーションしました。つい界隈を歩きたくなるコンテンツによって「まち」に動きが生まれ、活気があふれています。他方、定住せずに仕事と余暇を楽しむワーケーションによって微住するスタイルも全国で進んでいます。気に入った場所で楽しみながらその地域と関わりを持ち仕事もする。移住者は地元と関係を持ち、コミュニケーションによってお互いを認め、高めあうことで新たな価値が芽生えていきます。このように、まちに魅力を感じて集まる人々と、地元との交流が新たな価値を生んでいます。ポートランドが世界中で注目されているのは区画（町内のような）で、ミクストユースによって付加価値のある暮らしができることが理由の一つなのです。

近代都市計画で有名なエベネザー・ハワード（英国）は、産業革命で都市部に人口が集中したことで、人は自然から乖離して通勤や家賃、さらには環境悪化など生活に苦しんでいたことに着目しました。ハワードは「都市と農村の結婚」によって、都市部の経済的利点と、農村の優れた生活環境を結合した豊かな生活「田園都市」を提唱し、問題解決を目指しました。田園都市はミクストユースそのものであり、日本では渋沢栄一氏らが1918年に田園都市株式会社を設立、理想的な住宅地「田園都市」として1922年に洗足田園都市を開発し分譲がスタートしました。しかしながら、都市部へ通勤する人が増えるにつれて、「働く」ことと「住む」ことが乖離してしまい、その結果本来の田園都市の機能を満足に果たせなくなってしまいました。ところが最近、多摩川沿いでは水辺と一体となったまちづくりが進んでいます。さらに、二子玉川ライズはLEED ND（まちづくり部門）やNC（新築ビル部門）でゴールドを認証を取得しており、環境に配慮された新しいまちがつくられています。上流の狛江市では、TAMARIBAが定期的に開催され、水辺空間の利活用と関心を住民に伝えています。2020年4月には、水辺などの立地環境を活かした「舟運の活性化」、「環境再生・学習の場づくり」および「賑わいの創出」実現に向けて、JR東日本グループが船着場

一般社団法人 環境文化研究所　田中 謙次

や干潟を整備した「WATERS takeshiba」を誕生させました。このような変化は、これまでの箱モノなまちづくりから、ヒトを起点とした新しいサービス創造への変遷なのです。

戦後、日本では排水でしかなかった川への意識も今は大きく変化してきました。本来、川によって文明が生まれて民俗文化が育まれてきました。江戸時代、歌川広重の「東海道五十三次」には、日本橋から三条大橋まで実に３８箇所の絵に水辺が描かれています。旅をしながら水辺を眺め、商いや祭りで賑わい、人が集い憩う場所が水辺であり、水辺こそが人間の欲を充たす本能的な場所なのかもしれません。

そしていま、ミズベリングプロジェクトなどによって水辺に人が集い利用されることでまちと川の境界があいまいになってきました。このあいまいさを生んでいくことで、まちと水辺を行き交う人の流れに新たな「流れ」を生んでいます。道頓堀川では、建物の入り口を川側に戻して再生した、「とんぼりリバーウォーク」には観光者が散策や遊覧船で、水辺を楽しむなど、本質的な水都大阪を楽しんでいます。

本来、水辺によってまちが発展してきたにも関わらず、そこには物理的・心理的なバリアがありました。まちづくりにおいても、「水辺」はコンテンツの一つとして扱われることも多いのですが、本来は景観を育む原点なのです。そして、生活に水辺を取り入れることで豊かさが増すでしょう。例えば、水辺で働く、水辺に住む、水辺で遊ぶ、水辺で買い物をする、そして水辺で医療を受け、水辺で学ぶなど。「ここは自分の場所だ」と次第に人は思うことでしょう。自分や大切な人と時を過ごすための水辺を大切に使いたいという本質的な思いがシビックプライドを醸成させていきます。このシビックプライドこそがまちを育てていく重要なアイデンティティーなのです。住民が誇りを持つまちは、とても魅力的で、観光地が無くても人は訪れたくなるでしょう。これからのまちづくりにはこのような水辺のセンスが欠かせません。心に感じる豊かな水辺がミクストユースの基盤であれば、そこにしかないまちの魅力として大きな価値を生み続けていくでしょう。

一方、川には水難事故というリスクがあります。水辺に集まったほとんどの人がリスクに気づかずに被害に遭います。まちと水辺が融合するからには、ミクストリームに合わせたリスクマネジメントが必要であり、ＲＡＣの安全指導は今後、水辺があるまちづくりに対応した、多様性が求められていくでしょう。50年先も安全に楽しく心地よい水辺空間が続くように、皆さんと一緒に育てていきましょう。

水辺にボートやバーが集まり、まちと水辺が一体となっている（ニューハウン）

水上のこたつや水陸両用バスでまちが面白いことになっている（大川）日本シティサップ協会撮影

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会理事役員名簿（2021年3月31日時点）

順不同・敬称略

役　職	氏　名	所属団体
代表理事	久住　時男	見附市長
理　事	宮尾　博一	共和コンクリート工業株式会社
理　事	藤芳　素生	八千代エンジニヤリング株式会社
理　事	北川　健司	NPO法人 エヌエスネット
理　事	金沢　緑	関西福祉大学
理　事	大内　雅司	NPO法人 ダウン・ザ・テッシ
理　事	千葉　利光	NPO法人 帯広NPO28サポートセンター
理　事	塚原　俊也	くりこま高原自然学校
理　事	佐瀬　正雄	阿賀川・川の達人の会
理　事	佐藤　繁一	NPO法人 国際自然大学校
理　事	森　美文	森環境教育事務所
理　事	坂本　均	ノーム自然環境教育事務所
理　事	辻　英之	NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター
理　事	和田　信治	NPO法人 白馬国際自然学校
理　事	名和　あけみ	NPO法人 長良川環境レンジャー
理　事	辻山　正甫	近畿子どもの水辺ネットワーク
理　事	青木　勇	日本セーヌティカヌーイング協会
理　事	内村　政彦	NPO法人 川塾北九州
理　事	土井　裕子	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク
理　事	春園　四郎	かごんま川内川RAC
理　事	佐藤　陽平	一般社団法人 ひとねるアカデミー
理　事	高橋　晃雄	NPO法人 つくばハーモニー
理　事	金尾　健司	独立行政法人 水資源機構
理　事	大場　博子	印旛沼探検隊
理　事	相馬　孝	小川原湖自然楽校
理　事	森井　智江	NPO法人 まち・川づくりサポートセンター
監　事	吉野　英夫	公益財団法人 河川財団
監　事	田村　祐司	東京海洋大学
顧　問	大野　重男	公益財団法人 ハーモニィセンター
顧　問	大西　亘	公益財団法人 日本河川協会
顧　問	岡島　成行	学校法人 青森山田学園
顧　問	岡山　和生	松尾建設株式会社
顧　問	小俣　篤	公益財団法人 河川財団
顧　問	横森　源治	公益財団法人 河川財団
顧　問	柏木　才助	公益財団法人 リバーフロント研究所
顧　問	佐藤　初雄	NPO法人 自然体験活動推進協議会
顧問弁護士	早川　修	早川修総合法律事務所
オブザーバー	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課	

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会会員名簿（2021年3月31日時点）

順不同・敬称略

会員区分（種別）	団体名	担当者住所（都道府県）
正会員	NPO法人 帯広NPO28サポートセンター	北海道
正会員	NPO法人 しりべつリバーネット	北海道
正会員	NPO法人 鶴見川流域ネットワーキング	神奈川県
正会員	NPO法人 長良川環境レンジャー協会	岐阜県
正会員	NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター	長野県
正会員	NPO法人 川塾 北九州	福岡県
一般会員	江戸川・水フェスタinいちかわ実行委員会	千葉県
正会員	日野川流域交流会	福井県
一般会員	kanute	埼玉県
正会員	NPO法人 川や海を守り伝統を伝える会	北海道
正会員	阿賀川・川の達人の会	福島県
一般会員	東予環境グループ	愛媛県
一般会員	野外教育事業所 ワンパク大学	東京都
正会員	公益財団法人 ハーモニィセンター	東京都
正会員	NPO法人 国際自然大学校	東京都
正会員	NPO法人 地域交流センター	東京都
正会員	NPO法人 小貝川プロジェクト21	茨城県
正会員	NPO法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク	宮崎県
正会員	くりこま高原自然学校	宮城県
正会員	NPO法人 エヌエスネット	岐阜県
正会員	一般社団法人 地球の楽校	神奈川県
正会員	NPO法人 白馬国際自然学校	長野県
正会員	NPO法人 大淀川流域ネットワーク	宮崎県
一般会員	～えどがわ自遊楽校～みずとみどりの寺子屋	東京都
正会員	森環境教育事務所	神奈川県
正会員	近畿子どもの水辺ネットワーク	大阪府
正会員	NPO法人 白川流域リバーネットワーク	熊本県
一般会員	ネイチャープラネット	栃木県
正会員	栃木カヤックセンター	栃木県
正会員	株式会社アオキカヌーワークス	大阪府
正会員	公益財団法人 河川財団	東京都
一般会員	田倉川と暮らしの会	福井県
正会員	GNOM（ノーム）自然環境教育事務所	福井県
一般会員	有限会社カッパクラブ	群馬県
正会員	小川原湖自然楽校	青森県
一般会員	NPO法人 地球環境カレッジ	東京都
正会員	公益社団法人 日本河川協会	東京都
正会員	アドベンチャー集団Do!	群馬県

特定非営利活動法人 川に学ぶ体験活動協議会会員名簿（2021年3月31日時点）

順不同・敬称略

会員区分（種別）	団体名	担当者住所（都道府県）
正　会　員	ＮＰＯ法人 ダウン・ザ・テッシ	北海道
正　会　員	新潟県見附市役所	新潟県
正　会　員	NPO法人 自然体験共学センター	福井県
正　会　員	かごんま川内川RAC	鹿児島県
正　会　員	一般社団法人 日本セーフティカヌーイング協会	神奈川県
正　会　員	NPO法人 馬瀬川プロデュース	岐阜県
正　会　員	NPO法人 青少年体験活動研究所	群馬県
正　会　員	株式会社東京建設コンサルタント	東京都
正　会　員	一般社団法人 環境文化研究所	福井県
一般会員	国定観光公園 マングローブ茶屋	鹿児島県
正　会　員	川と自然の体験楽校WAO！	福岡県
正　会　員	RACファンクラブ	茨城県
正　会　員	NPO法人 みずのとらBELL隊	熊本県
正　会　員	八千代エンジニヤリング株式会社	東京都
正　会　員	NPO法人 緑の風	岐阜県
正　会　員	玄海グリーン＆アドベンチャー共同企業体	福岡県
学校会員	広島県海田町立海田東小学校	広島県
正　会　員	有限会社芦生の里 芦生山の家	京都府
一般会員	ストームフィールドガイド	茨城県
一般会員	浦安水辺の会	千葉県
学校会員	東京都板橋区立高島第六小学校	東京都
正　会　員	株式会社クリアウォーター	千葉県
正　会　員	共和コンクリート工業株式会社	東京都
正　会　員	NPO法人 まち・川づくりサポートセンター	北海道
正　会　員	NPO法人 会津阿賀川流域ネットワーク	福島県
学校会員	福井県小浜市立口名田小学校	福井県
学校会員	栃木県立馬頭高等学校	栃木県
正　会　員	NPO法人 どんころ野外学校	北海道
一般会員	目黒川流域交流会	東京都
正　会　員	那珂川ステーション	栃木県
学校会員	長岡市立上川西小学校	新潟県
正　会　員	ＮＰＯ法人 ひむか感動体験ワールド	宮崎県
学校会員	板橋区舟渡小学校	東京都
一般会員	NPO法人 青空見聞塾	岐阜県
学校会員	町田市立鶴川第二小学校	東京都
一般会員	株式会社フレンドシップアドベンチャーズ	滋賀県
一般会員	結の舟	岐阜県
一般会員	Omuche[オムーチェ]outdoor & sports free guide	栃木県
学校会員	日野市立平山小学校	東京都
正　会　員	ゴーネイチャー	熊本県
正　会　員	ＮＰＯ法人 つくばハーモニー	茨城県
正　会　員	Alps Line Cruise	長野県
一般会員	持続可能な生態系を考える環境共有研究会(RGEEA)	東京都
正　会　員	印旛沼探検隊	千葉県
正　会　員	特定非営利活動法人 二ツ井町観光協会	秋田県
正　会　員	一般社団法人 流域生態研究所	北海道
正　会　員	一般社団法人 ひとねるアカデミー	大分県
正　会　員	一般社団法人 いわて流域ネットワーキング	岩手県
正　会　員	一般社団法人 ラフティング協会	大阪府
正　会　員	NPO法人 ウォーターズ・リバイタルプロジェクト	高知県
正　会　員	ＰＦＩ佐原リバー株式会社（水の郷さわら）	千葉県
一般会員	かすみがうら市	茨城県
正　会　員	大岡川リバーアクション	神奈川県
正　会　員	利根川の魅力を育む会	埼玉県
正　会　員	仁淀川清流保全推進協議会	高知県
正　会　員	筑後川防災施設くるめウス　事業部	福岡県
学校会員	気仙沼市立面瀬小学校	宮城県
一般会員	一般財団法人 石狩川振興財団	北海道
正　会　員	次世代のためにがんばろ会	熊本県
正　会　員	カワラバン	宮城県
正　会　員	NPO法人 球磨川アドベンチャーズやつしろ	熊本県
正　会　員	ハッピープラス株式会社	岐阜県
一般会員	株式会社will be	北海道
一般会員	株式会社水辺総研	東京都
正　会　員	flip water	埼玉県
正　会　員	東京海洋大学 海洋科学系 海洋政策文化学部門	東京都
正　会　員	金尾　健司	千葉県

冊子委員

順不同・敬称略

役　職	名　前
書　籍　委　員	平山　康弘
書　籍　委　員	高橋　晃雄
書　籍　委　員	菅原　一成
書　籍　委　員	田中　謙次
書　籍　委　員	山田　大志
書　籍　委　員	佐藤　陽平
オブザーバー	菅原　正徳
オブザーバー	吉野　英夫
川に学ぶ体験活動協議会事務局	

あとがき

日本水大賞は、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる21世紀の日本と地球を目指し、水循環の健全化に貢献するさまざまな活動を対象に、社会的貢献度が高い、水防災、水資源、水環境等の分野における活動の中から、特に優れたものを表彰し、広く国民に発信することを目的として、創設されました。

2018年にＲＡＣの活動である「次世代を担う子どもが安全に楽しく川の恵みを享受できる社会の推進」が第20回日本水大賞を受賞し、本冊子は、副賞200万円の一部を活用して発刊しました。

全国の川で活躍されている皆さんの寄稿は、子どもの頃の川での楽しかった記憶や郷土の川を取り巻く自然への愛情、人々を川に呼び戻したいという強い気持ちに溢れたものです。

発刊に際し、素晴らしい寄稿をしていただいた皆様及び関係者の方々に改めて感謝を申し上げます。

冊子委員一同